

地域を表象する楽曲の動態性に関する研究

——《長野県歌「信濃の国」》《合唱と管弦楽のための組曲「北九州」》
《プロジェクト FUKUSHIMA! 「ええじゃないか音頭」》を事例として——

別添資料

東京藝術大学大学院 音楽研究科 音楽文化学専攻 芸術環境創造領域

2017 年度入学

2317920

榎原 彩

2020 年 10 月

別添資料 目次

別添資料1	－文化に関する政策の変遷と本研究における地域を表象する楽曲の時代区分	2
別添資料2	－《長野県歌「信濃の国」》と長野県行政.....	3
別添資料3	－《合唱と管弦楽のための組曲「北九州」》と北九州市行政.....	9
別添資料4	－『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』の参与観察	31

別添資料図表等目次

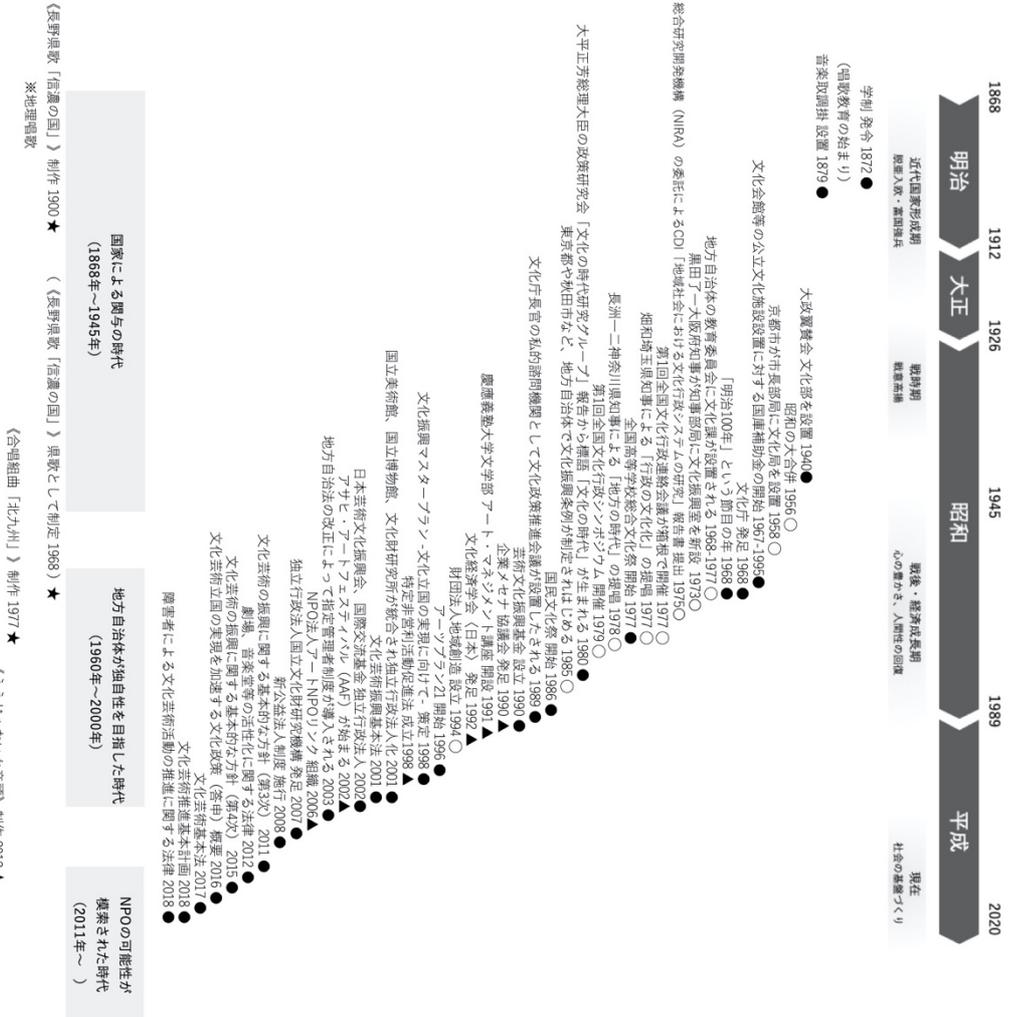
【図表 1】	北九州市の文化振興に関するさまざまな取組み－長期構想と文化振興（1）
【図表 2】	北九州市の公立文化施設の推移（音楽関係）
【図表 3】	北九州市の文化振興に関するさまざまな取組み－長期構想と文化振興（2）
【図表 4・5・6・7】	『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』設営（1日目）の様子（1）
【図表 8・9・10・11】	『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』設営（1日目）の様子（2）
【図表 12】	8月11日（土）TIME TABLE
【図表 13・14】	ステージパフォーマンス（1日目）の様子
【図表 15・16】	「オーケストラ FUKUSHIMA!」によるパレードの様子
【図表 17】	櫓上のパフォーマンス、盆踊り（1日目）の様子
【図表 18・19】	『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』設営（2日目）の様子
【図表 20】	8月12日（日）TIME TABLE
【図表 21・22・23・24】	ステージパフォーマンス（2日目）の様子（1）
【図表 25・26】	櫓上のパフォーマンス、盆踊り（2日目）の様子
【図表 27】	ステージパフォーマンス（2日目）の様子（2）
【図表 28】	『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』盆踊り（2日目）の様子（1）
【図表 29】	8月12日（日）〈プロジェクト FUKUSHIMA!〉盆踊り セットリスト
【図表 30・31・32・33】	『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』盆踊り（2日目）の様子（2）
【図表 34】	『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』盆踊り（2日目）の様子（3）
【図表 35】	『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』盆踊り（2日目）の様子（4）

凡例

博士論文本文に準じる。

別添資料1 - 文化に関する政策の変遷と本研究における地域を表象する楽曲の時代区

文化に関する政策の変遷と本研究における地域を表象する楽曲の時代区分：筆者作成



参考：

文化庁×九州大学共同研究チーム編『はじめの「社会包摂」文化芸術「ハンドブック」～ひとりと向き合い共に生きる社会をつくる』九州大学大学院芸術工学研究院附属ソーシャルセンター 2019年。

松下山一・森悠編『文化行政の自己革新』東京：学陽書房、1991年。

森悠編『市民文化と文化行政』東京：学陽書房、1988年。

中川幾郎『新市民時代の文化行政—文化・自治体・芸術—』東京：公人の友社、1995年。

根本昭『日本の文化政策—「文化政策学」の構築に向けて—』東京：朝倉書房、2001年。

古賀弥生『芸術文化と地域づくり—アートで人とまちをいっしょに—』福岡：九州大学出版会、2020年。

藤野一夫『文化・芸術を活かしたまちづくり研究会『基礎自治体の文化政策』』東京：水曜社、2020年。

別添資料2 - 《長野県歌「信濃の国」》と長野県行政

日本において、国による文化政策がもっとも強力におこなわれたのは、明治時代に入ってからであり、西洋列強諸国による植民地化を避け、むしろそこに追いつくために西洋文明をとり入れる文明開化が進むなかで、西洋にルーツをもつ芸術も積極的にとりいれられた。さらに明治政府は、欧米における文化政策の基本にあった「『国民国家』建設に向けてのアイデンティティの形成——国民の文化的統合」¹をめざし、日本を欧米型の中央集権的な国民国家とするために、それまでの藩や地域社会にあった人々の帰属意識を、「日本」という国家の「国民」へと転換させていったとされている。

地理歴史唱歌《信濃の国》も、この文化政策の流れのなかでうみだされた。むしろ、伊澤修二が長野県出身であり、作詞者の浅井が伊澤による編纂の小学読本から「吾妻はやとし日本武」という歌詞を採ったとされていることや²、作曲者の北村が東京音楽学校で伊澤に師事した教え子であり、西洋と日本の音楽を折衷して楽曲を制作した背景から、東京で最先端の教育を受けた人々が「近代」を日本の隅々にまで行き渡らせるという当時の社会的、文化的動向を、直接的に反映しており、当時制作された他の唱歌よりも、密接な文化政策との関連性が示唆される。また、それと同時に、日清戦争などを契機として国家意識が高まり、それに関わる教育も強化されていた当時において、《信濃の国》を含めた郷土唱歌は「地方」の動きにとどまらず、全国規模での動きの一環でもあった³。しかしながら、日本の文化政策が徐々に戦争の機運に傾き、唱歌もその動きに絡めとられていくのに対し、《信濃の国》は制作された1900年（明治33年）時点で、教育現場がその機運にのみこまれることを懸念してうまれたものであったことや、東京でおこなわれているものをそのまま導入し、地方を同質化、均質化させるのではなく、《信濃の国》といった地域独自の楽曲を制作し、地域の文化資源とすることで、先端の知識と技術を長野県という地方で還元し、地域文化として発展させ、さらにはそれをまた東京などの中心、そして世界に発信するという思惑が少なからずあったことは留意すべき点である。

では、そもそも現在、長野県は行政として、どのように《長野県歌「信濃の国」》を政策上に位置づけているのだろうか。

¹ ネットTAM講座「伊藤裕夫 文化政策入門第2回 日本の文化政策の状況【1】」（2008年3月15日更新）、<https://www.nettam.jp/course/cultural-policy/2/>、最終閲覧：2020年5月12日。

² 中村佐伝治『県歌「信濃の国」を考える』長野：ほおずき書籍、1990年、71~72頁。

³ 渡辺裕『歌う国民』東京：中央公論新社、2010年、184頁。

長野県は、2013 年度に県政運営の基本となる総合計画として「しあわせ信州創造プラン」を策定しており、そのなかで《長野県歌「信濃の国」》は「第 1 編 現状認識」の「第 2 章 長野県のポテンシャル」で、「県歌『信濃の国』にもうたわれるように『十州』（8 県）と接しており、古くから東山道、中山道などが通る交通の要衝となってきました。」⁴と、大都市圏へアクセスしやすい地理的状况を説明する一文に例えとして用いられている。また、同章の「3 際立つ地域の個性」という項目においては、長野県内それぞれの地域が個性を有している一方で、「多くの県民が県歌『信濃の国』に親しみを感じているように、私たちは長野県民としての一体感も合わせ持っており、それぞれの地域の魅力を磨きながら、県民みんなが心をつなげて県づくりに取り組んでいくことを可能としています。」⁵と述べられており、多彩な地域アイデンティティの集合体としての長野県を統一する象徴として《長野県歌「信濃の国」》が提示されている。

この総合計画は、2018 年度に、2030 年の長野県の将来像を展望し、これを実現するための今後 5 年間の行動計画「しあわせ信州創造プラン 2.0」として改めて策定されており、この総合計画においても、《長野県歌「信濃の国」》は次の 2 箇所において言及されている。まずは、冒頭の県知事の言葉内で、《長野県歌「信濃の国」》の 6 番の一節「みち一筋に学びなば 昔の人にや劣るべき」が引用され、教育県として、「自らが積極的に知識や技能などを身に付けようとする学びの風土」⁶があり、さらに県内 77 市町村がそれぞれの特色を生かしながら発展し、公民館・自治会の活動が盛んであることなど、自治の意識が強固な県であることが強調されている。また、総合計画の最後のページに、《長野県歌「信濃の国」》の全歌詞が掲載されている。2018 年度版で、全歌詞が掲載されるに至ったのは、2018 年 5 月で《長野県歌「信濃の国」》制定 50 周年を迎えるにあたり、どう歌い継いでいくのか、また活用するのかなどが改めて再検討された背景によるものだと考えられるが、総合計画の 2013 年度版、そして 2018 年度版の両計画内では、具体的な《長野県歌「信濃の国」》の活用事項についての言及はなかった。むしろ、「『信濃の国』で歌われているように」といった表現が使われており、長野県行政にとって《長野県歌「信濃の国」》は普及させる対象ではなく、県政の下地に位置する一般知識として認識されていることがみてとれる。

⁴ 長野県総合計画「しあわせ信州創造プラン」2013 年、12 頁。

⁵ 同前、16 頁。

⁶ 長野県総合計画「しあわせ信州創造プラン 2.0」2018 年。

次に、これら総合計画をふまえた個別施策を確認する。2018年に策定された「長野県文化芸術振興計画」⁷においても《長野県歌「信濃の国」》は、「長野県の文化の特性」を説明する一文のなかにとりあげられており、「平成30年には制定50周年を迎える県歌『信濃の国』の3番にも、蚕からとれる細い糸が『国の命をつなぐなり』とうたわれているように」⁸と、長野県の産業を解説する例えとして用いられている。加えて、「長野県文化芸術振興計画」では具体的な施策でもとり扱われており、3つ掲げられた施策のめざす姿のうちのひとつである「(3)文化芸術の力を活かした地域づくり」における「(1)地域文化の保護・継承」「ア 地域文化に対する意識の高揚」の主な取組に記載されている。「ア 地域文化に対する意識の高揚」の施策の方向性は「地域の歴史や受け継がれてきた伝統文化などについての学習を通じ、郷土を愛する心を育みます」⁹となっており、具体的には「平成30年の県歌制定50周年を契機として、『信濃の国』等を活用し、地域の歴史や文化についての学習活動を推進し、郷土を愛する心を育む」¹⁰とされている。

一方で、教育における施策ではどのように扱われているのだろうか。「文化芸術振興計画」と同じく総合計画の個別計画として2013年に策定された「第2次長野県教育振興基本計画」¹¹では、長野県の郷土教育や伝統、優れた教育水準を次世代に受け継いで充実させ、その自然や歴史、文化の特色や強みを活用して、長野県民としてのアイデンティティ（帰属意識、同一性）を育む教育を「信州教育スタンダード」¹²として提示した。この「信州教育スタンダード」は、基礎自治体や教育現場に対して取り組みを強制するものではなかったが、県として必要な施策や事業を推進し、積極的な周知や啓発活動によって、学校や家庭、地域、企業、市町村などの連携協力を促進するものだとして記されている。そして、その「信州教育スタンダード」の推進項目のなかで《長野県歌「信濃の国」》は、「伝統」「活動」「目標」という区分のなかでも「県民・学校等の自主的取組による優れた伝統で、施策を支える基盤となるもの」である「伝統」に分類されており、その「設定の理由・趣旨」は「学校で県歌『信濃の国』や地域の歌を学んでいる」ため、「多くの県民が、学校で『信濃の国』や市町村の歌を習い、大人になっても愛着を持って歌っていることは、他に例を見ない本県独自の特色

⁷ 長野県「長野県文化芸術振興計画」2018年。

⁸ 同前、7頁。

⁹ 同前、26頁。

¹⁰ 同前。

¹¹ 長野県「第2次長野県教育振興基本計画」2013年。

¹² 同前、12頁。

であり、今後も維持・充実していきたい」となっている。また、これを「推進して実現したい未来の姿」として「全ての県民（県出身者）が『信濃の国』を歌え、信州に誇りを持つことが掲げられた。

しかしながら、この「信州教育スタンダード」は、2018年度に「しあわせ信州創造プラン 2.0」の個別計画として策定された「第3次長野県教育振興基本計画」¹³では言及がなされていない。「第3次長野県教育振興基本計画」において《長野県歌「信濃の国」》は、「第4編 これからの長野県教育のあり方」の第1基本理念「『学び』の力で未来を拓き、夢を実現する人づくり」で記述されている。そこでは、「信州人が培ってきた『学び』とは、課題解決に向け、子どもから大人までが自ら行動し、影響し合い、自然環境や地域に働きかける実践的・協働的な『学び』」¹⁴であり、その「『学び』は、長野県民の誇りとして、県歌『信濃の国』6番の歌詞に込められている」と記され、6番の歌詞「みち一筋に学びなば 昔の人にや劣るべき 古来山河の秀でたる 国は偉人のある習い」が引用されている。また、同計画内では、長野県教育のあり方における「特色ある取組」として「県歌制定50周年を迎える『信濃の国』」という項が設けられ、《長野県歌「信濃の国」》の概要が説明されている¹⁵。すなわち、「第3次教育振興基本計画」でも、《長野県歌「信濃の国」》は長野県の理念を体現するものとして扱われる傾向が見受けられた。具体的な取組としては、「第5編 基本計画」 「第2 施策の展開」 「2 信州を支える人材の育成」の「(2) 長野県・地域を学ぶ体験学習」で活用するとされている。「(2) 長野県・地域を学ぶ体験学習」の目指す成果は、「子どもたちが郷土に誇り・愛着を持てるようにします」「子どもたちが豊かな自然や地域の文化を効果的に体験できる環境を整備します」であり、《長野県歌「信濃の国」》は「①ふるさと教育の推進」における取組のひとつとして用いられ、「県歌『信濃の国』を活用し、ふるさと信州を学び直すことにより、郷土に誇り・愛着を持ってもらえる取組を、市町村や各種団体と協働しながら推進」と記されている。よって、現在の長野県行政における《長野県歌「信濃の国」》の位置づけも、基本的には今でも制作当時と変わっておらず、教育の場において郷土教育の教材として活用することで郷土愛を醸成し、長野県民としての連帯感と地域アイデンティティを創出するものとして位置づけられていることが、ここから読みとれる。

¹³ 長野県「第3次長野県教育振興基本計画」2018年。

¹⁴ 同前、21頁。

¹⁵ 同前、23頁。

加えて、「第2次長野県教育振興基本計画」には、県内の小学校の音楽科や社会科の授業でとりあげられ、基礎自治体ごとの合同音楽会などでも歌われていると記載されており、長野県の施策としてだけでなく、長野県教育委員会の学習指導上でも取り入れられていることがわかった。例えば、長野県教育委員会が1998年度に作成した小学校の学習指導手引きには、「地域に関連する歌を歌ったり、県内の地形や産業などを考えたりするため、信濃の国を足掛かりとする」¹⁶という指導事例が紹介されている。また、「平成24年度学校経営概要のまとめ」では長野県内の公立小学校の93.9%、中学校の41.7%、「平成29年度学校経営概要のまとめ」では公立小学校の96.4%、中学校の48.9%で《長野県歌「信濃の国」》を歌う機会が設けられていると記されている。さらに、平成23年度からの学習指導要領には、「わが国の郷土の文化や伝統を受け止め、それを継承・発展させるための教育の充実」が主な改善事項のひとつとして掲げられ、長野県においても「信濃の国などの郷土の歌を題材にしてふるさとを学ぶことが大切」¹⁷だと述べられている。

このように、現在でも長野県行政や教育委員会が、郷土教育の一環として《長野県歌「信濃の国」》をとらえているのに対し、長野県民はどのように考えているのだろうか。2015年度の長野県による県政モニターアンケートでは、認知度の他に「効果的な発信方法」についての問いも設けられており、それに対する回答では、「小・中学校で『信濃の国』を歌う機会を増やす」が75.4%、「駅や観光スポットで『信濃の国』を放送する」が63.9%、「県の広報誌、テレビやラジオの広報番組等で情報を発信する機会を増やす」が50.3%、「県公式ホームページで紹介する情報を充実する」が13.2%、「Facebook（フェイスブック）、Twitter（ツイッター）などのSNSで紹介する」が8.3%、「その他」が12.2%となっており、長野県民も、メディア媒体での普及よりも、教育現場で歌う場を設けて普及を促す方法を選択していた。これは2018年度の同モニターアンケートの結果でも変わっておらず、「『信濃の国』について学べる機会を充実する」が72.9%、「県の広報誌、テレビやラジオの広報番組等で情報を発信する機会を増やす」が59.1%、「『信濃の国』の曲や映像を放送する場を増やす」が56.3%、「県公式ホームページで紹介する情報を充実する」が23.1%、「Facebook（フェイスブック）、Twitter（ツイッター）などのSNSで紹介する」が21.6%、「その他」が10.6%となっており、選択肢のなかから「歌う機会を増やす」という記述がなくなっているが、かわりに「『信濃の国』について学べる機会を充実する」という選択肢が登場し、またこれ

¹⁶ 信濃毎日新聞「『信濃の国』30代は歌えない?」2015年12月15日。

¹⁷ 長野県「第2次長野県教育振興基本計画」2013年、18頁。

が1番割合の高いことから、長野県、また県民にとって《長野県歌「信濃の国」》は、「教育」や「学び」、そしてその場に結びついている現状が垣間見える。

以上より、現在の長野県における施策上では、《長野県歌「信濃の国」》は、歌うや踊るなどの身体表現を伴う芸術文化としてみなされているのではなく、自治体の理念を説明する際の例や、それを体現するものとして引用されており、学習活動の一環として認識され、活用されることで、シビックプライドや郷土愛を形成させる教材的活用がなされていることが判明した。

別添資料3 - 《合唱と管弦楽のための組曲「北九州」》と北九州市行政

まず、北九州市の基本構想・基本計画の推移から、そのなかで文化に関わる事柄がどのように位置づけられていたのかをまとめる。

1960年代の高度経済成長期にともなって起こった「工場の分散による環境の汚染や開発に伴う自然破壊がもたらされ、また貴重な伝統文化や文化財が切り捨てられるなど、社会的な歪みが増大し、地域連帯感は著しく衰退して」¹⁸いた状況からの脱却をめざし、地方自治体が、公害対策や自然環境の保全、歴史的環境の保存など、地域住民の要求に対して対応を迫られていた背景から「文化行政」が発生したこと、そして、公害や自然破壊という過酷な洗礼を受けた自治体が、住民の豊かな生活を維持していくために新しい発想で地域の特性を掘り起こし、地域としての主体性の確保が急務であることに思い至った中で「文化」への認識も次第に深められていったことなど¹⁹、当時の地方自治体行政が「文化」を希求した変遷は、北九州市でもみてとれる。

北九州市は、1901年に筑豊炭田から近い八幡村²⁰に官営製鉄所が設置されたことによって日本国内最大の鉄鋼供給地として工業化が進展し、戦後においては、鉄鋼・金属などの重工業を中心に発展して、高度経済成長の原動力となった。しかし、工業都市として栄えた一方で、北九州地域は「文化不毛の地」だといわれてきた²¹。北九州市の発足が1963年であることから、1960年代後半に日本全国で起こっていた公害問題や伝統文化、文化財の切り捨て、地域の連帯感の喪失が同市でも起こっていたことは推察できる。事実、1963年の「北九州市都市建設計画」の主要な基本方針には、「過大都市抑制のため、強力な行政指導と都市再開発を行うことにより、スラム街発生を排除し、騒音、犯罪、交通マヒ、大気汚染をなくすことに全力を傾ける」²²とある。

また、1965年から始まった「北九州市長期総合計画基本計画(北九州市マスタープラン)」では、市民自治、市民福祉優先を理念とした市民参加方式を積極的に採り入れ、基本構想の提案にも、市民文化について「市民ひとりひとりの人間性や教養をたかめ、市民文化の高揚

¹⁸ 根木昭 他「1980年代における『文化行政』の時代背景—『文化の時代』の社会的背景と『地方の時代』の文化的側面—」、長岡技術科学大学『長岡技術科学大学研究報告』18号、1996年、63頁。

¹⁹ 同前。

²⁰ 後の八幡市。

²¹ 発端は、北九州市が発足した当時に某週刊誌が、「北九州市は文化不毛の地だ」という記事を載せたからだとされる。

²² 新修・北九州市史編纂会議編『新修・北九州市史 市政編』福岡：北九州市、2017年、41頁。

を図るため、文化施設や文化活動の場を整備して文化的環境の形成を進めるとともに、市民活動の育成、助長につとめる」²³ことを基本に、「市民文化の高揚」が掲げられている。その計画にあげられた7つの項目には「1. 総合文化センターの設置」「2. 総合スポーツ施設の設置、拡充」「3. 図書館活動の強化、充実」「4. 文化財の保護」「5. 自然風致地区の設定と動植物園の設置、拡充」「6. 国際文化館の設置」「7. 文化団体活動の助成」「8. 文化行政の機構確立」が設定された²⁴。また、この時期には「文化施設がないことが『文化の砂漠』につながる大きな要因」だと考えられており、公立文化施設などハードの建設を中心とした、「市民の文化的環境を整備する」ことに重点を置いた文化行政が北九州市でも展開された²⁵。《合唱組曲「北九州」》の制作を承認した市長の谷は、1966年に策定された「北九州市長期総合計画実施計画」において、「明るい町づくり」政策を実現するとし、行財政に①きれいな町づくり（生活環境の整備）、②すこやかな町づくり（教育・文化・福祉の向上）、③ゆたかな町づくり（産業と都市基盤の整備）という3つの柱を据えた²⁶。さらに、1968年には文化芸術活動で業績のあった個人や団体を顕彰する「市民文化賞」が創設され、同年6月には教育委員会内に「文化課」が設置された。これについて『新修・北九州市史 文化編・教育編』では「今でこそ文化振興のための部署は自治体にあっては当然であるが、当時は文化振興を市政における重要課題とする取組みは、まことに先進的であった」²⁷と述べられている。

さらに、1974年に策定された「北九州市基本構想」では4つの都市像²⁸が掲げられ、そのうち都市像①「豊かな暮らしをまもる高福祉都市へ」であげられた5つの基本方針には「地域に根をおろした教育・文化をつくりましょう」とある²⁹。また、都市像④「市民の手でつくる都市へ」は、「都市の主権者である市民自らが参加して市政を推進しようという市民都市の理念を示すもの」であり、「社会経済が激変する中で、近隣社会、コミュニティにおいて、連帯感に支えられた新しい地域社会を創造していくことの必要性」が強まっている

²³ 新修・北九州市史編纂会議編『新修・北九州市史 文化編・教育編』福岡：北九州市、2018年、200頁。

²⁴ 同前、8頁。

²⁵ 同前、201頁。

²⁶ 新修・北九州市史編纂会議編『新修・北九州市史 市政編』福岡：北九州市、2017年、38~41頁。

²⁷ 新修・北九州市史編纂会議編『新修・北九州市史 文化編・教育編』福岡：北九州市、2018年、9頁。

²⁸ ①豊かな暮らしをまもる高福祉都市へ、②安全で快適な生活環境をもつ都市へ、③活力ある産業・貿易都市へ、④市民の手でつくる都市へ、の4つ。

²⁹ 新修・北九州市史編纂会議編『新修・北九州市史 市政編』福岡：北九州市、2017年、46~47頁。

として、「地域社会の組織づくりを活発」にし、「市民の日常欲求の高まりに計画的にこたえ」、「市民参加に対応していく行政組織をつくり」、「自治体としての姿勢を確立」している³⁰。ここであげられている市民参加とは、行政へ市民の声を反映させるということであり、北九州市では市民を交えた審議会が活発に開催されたほか、市民世論調査や市民のアイデア募集、市政ダイヤル・モニターからの提案募集と懇談会の開催、市職員のアイデア募集などがそれにあたる³¹。「市民文化」にかかる項目としては、「市民生活の豊かさを物質的・経済的生活条件に加え、精神的、文化的豊かさとうるおいが必要であることが強調」され、「余暇時間学習、教養、レクリエーションなどの文化的サービスや施設整備の必要性」が示されている³²。また、「市民ひとりひとりが、個人としてあるいは市民全体として、文化的豊かさを生活のなかに広げ、文化の創造性が自然に高められるように施設、環境、条件を開発整備していく」とした³³。なお 1974 年には、《合唱組曲「北九州」》の演奏にも参加している北九州市少年少女合唱団がソフト事業として結成されており、「現在の『合唱の街・北九州』の隆盛につなが」る萌芽をみることができる³⁴。

1975 年には、この構想を実現させるための「新中期計画」が、世論調査や多くの市民集会を通じて市民の意見や要望を聴取する市民参加方式によって策定され、ここでも 8 項目あげられた基本的な考え方のなかに、①「市民の自主的な活動の場となる身近な施設を整備するため、小学校区から行政区に至る各段階の生活圏に対応させながら、複合的あるいは多目的な施設の配置と、相互の有機的連携」や、②「市民の福祉、保健、教育、文化のための環境の整備と施策の推進」、⑧「市民の要望にこたえる態勢のいっそうの充実と行政運営の改善」などがあげられた³⁵。また、この計画には「文化活動の育成」も掲げられており、市民の自主的な文化活動の育成のために、「機会の提供や指導者派遣、運営助成などを行う」といった具体策が示されていた³⁶。この計画の成果として、『新修・北九州市史 文化編・教

³⁰ 新修・北九州市史編纂会議編『新修・北九州市史 市政編』福岡：北九州市、2017 年、46~47 頁。

³¹ 同前、48 頁。

³² 新修・北九州市史編纂会議編『新修・北九州市史 文化編・教育編』福岡：北九州市、2018 年、9~10 頁。

³³ 同前、203 頁。

³⁴ 同前、9 頁。

³⁵ 新修・北九州市史編纂会議編『新修・北九州市史 市政編』福岡：北九州市、2017 年、48~49 頁。

³⁶ 新修・北九州市史編纂会議編『新修・北九州市史 文化編・教育編』福岡：北九州市、2018 年、10 頁。

育編』には、《合唱組曲「北九州」》の名があがっており、「現在も市民による混声合唱団『北九州をうたう会』の参加によって公演が行われ、歌い継がれている」と記されている³⁷。

1980年には「新中期計画」の計画満了をうけ、新たに「新・新中期計画（プラン'80北九州）」が策定された。『新修・北九州市史 市政編』によると、「この計画の策定に当たって特に留意されたことは、『ハードからソフトへ』という発想の転換」だとされており、「社会資本の充実を目指して相次いで大型施設を建設してきた」ハード中心の「モノづくり」に偏らず、「これまで整備してきた施設の有効活用を図るなど、ソフト面への充実が注がれた」とされている。また、この計画の策定にも市民参加方式が積極的に導入され、特にこの時期から「市民の側にも積極的に参加し、発言の輪を広げていく傾向が認められるようになった」と述べられている³⁸。加えて、1985年には、「北九州市基本構想」を具現化するものとして「さわやか北九州プラン」が策定された。このプランにおいて掲げられた5つの主要テーマのうち、文化は②「心豊かな市民のまちへ」の「地域文化の創造」にあらわれている³⁹。

そして、1987年に〈北九州をうたう会〉発会の起因をつくった末吉が市長に就任する。末吉は、基本構想の改定に着手し、市民団体代表や市議会代表、学識経験者などから成る「北九州基本構想審議会」を設置した。この審議会では、市民約2,300人を対象とした配票調査（留置法）による「基本構想に関する世論調査」を実施したほか、市内の各種団体の代表や一般市民等も出席する「基本構想を考える市民のつどい」が7回にわたって開催された。そして、これら審議会の答申をもとに、北九州市は1988年に「北九州市ルネッサンス構想」を制定した⁴⁰。「北九州市ルネッサンス構想」とは、「水辺と緑とふれあいの“国際テクノロジー都市”へ」を基調テーマに、目指すべき5つの都市像⁴¹を定めたものであり、そのうち文化関連の項目としては「②健康で生きがいを感じる福祉・文化都市」で「文化の薫るまちづくりの推進」が掲げられた。この構想では、これまでの文化振興において、各種文化施設を「高水準で設置」してきたが、「各地に点在しているために百万都市の文化施設とし

³⁷ 新修・北九州市史編纂会議編『新修・北九州市史 文化編・教育編』福岡：北九州市、2018年、11頁。

³⁸ 新修・北九州市史編纂会議編『新修・北九州市史 市政編』福岡：北九州市、2017年、50頁。

³⁹ 同前、51~52頁。

⁴⁰ 同前、52~53頁。

⁴¹ 「①緑とウォーターフロントを生かした快適居住都市」、「②健康で生きがいを感じる福祉・文化都市」、「③あすの産業をはぐくむ国際技術情報都市」、「④海にひろがるにぎわいの交流都市」、「⑤未来をひらくアジアの学術・研究都市」。

ては規模や配置に問題が残ることや、ソフト面での充実が十分でないこと」⁴²が指摘された。また、「風土にふさわしい地域文化の創出と市民の主体的で自由な文化活動の支援に力点をおきつつ、都市の風格とイメージアップが重要である」⁴³と述べられている。この施策の具体的な実現のために、第一次⁴⁴、第二次⁴⁵、第三次⁴⁶、改訂版⁴⁷の実施計画が策定されており、その「第一次実施計画」において、《合唱組曲「北九州」》の名があがったとされる「ルネッサンス懇談会」が設置され⁴⁸、「個性ある地域文化の振興」として「国際的、全国的な文化イベントの実施」や「地域文化の再発見事業の継続」などが提言されている⁴⁹。確証を得るには至らなかったが、〈うたう会〉の会誌にも、末吉が注力していた市政の柱のひとつである「地域文化の再発見事業」⁵⁰によって〈うたう会〉が発足したとされており⁵¹、この「個性ある地域文化の振興」「地域文化の再発見事業の継続」の具体策を検討する際に、《合唱組曲「北九州」》が提示されたのではないかと推測できる。また、この「北九州市ルネッサンス構想」における文化振興の方向性の大きな特徴は「市民文化そのものの振興をはかるというよりも、芸術文化の振興が、まちづくりや都市の風格、イメージアップの手段としての役割を担う傾向が強くなった」⁵²ということだとされている。

以下、北九州市による長期構想における文化振興を整理した資料を引用する⁵³。

⁴² 新修・北九州市史編纂会議編『新修・北九州市史 文化編・教育編』福岡：北九州市、2018年、12頁。

⁴³ 同前、12頁。

⁴⁴ 1989年度～1993年度。

⁴⁵ 1994年度～1998年度。

⁴⁶ 1999年度～2003年度。

⁴⁷ 2004年度～2005年度。

⁴⁸ 「ルネッサンス懇談会」は芸術活動、文化活動の振興として設置されたとある（新修・北九州市史 文化編・教育編 2018：12）。

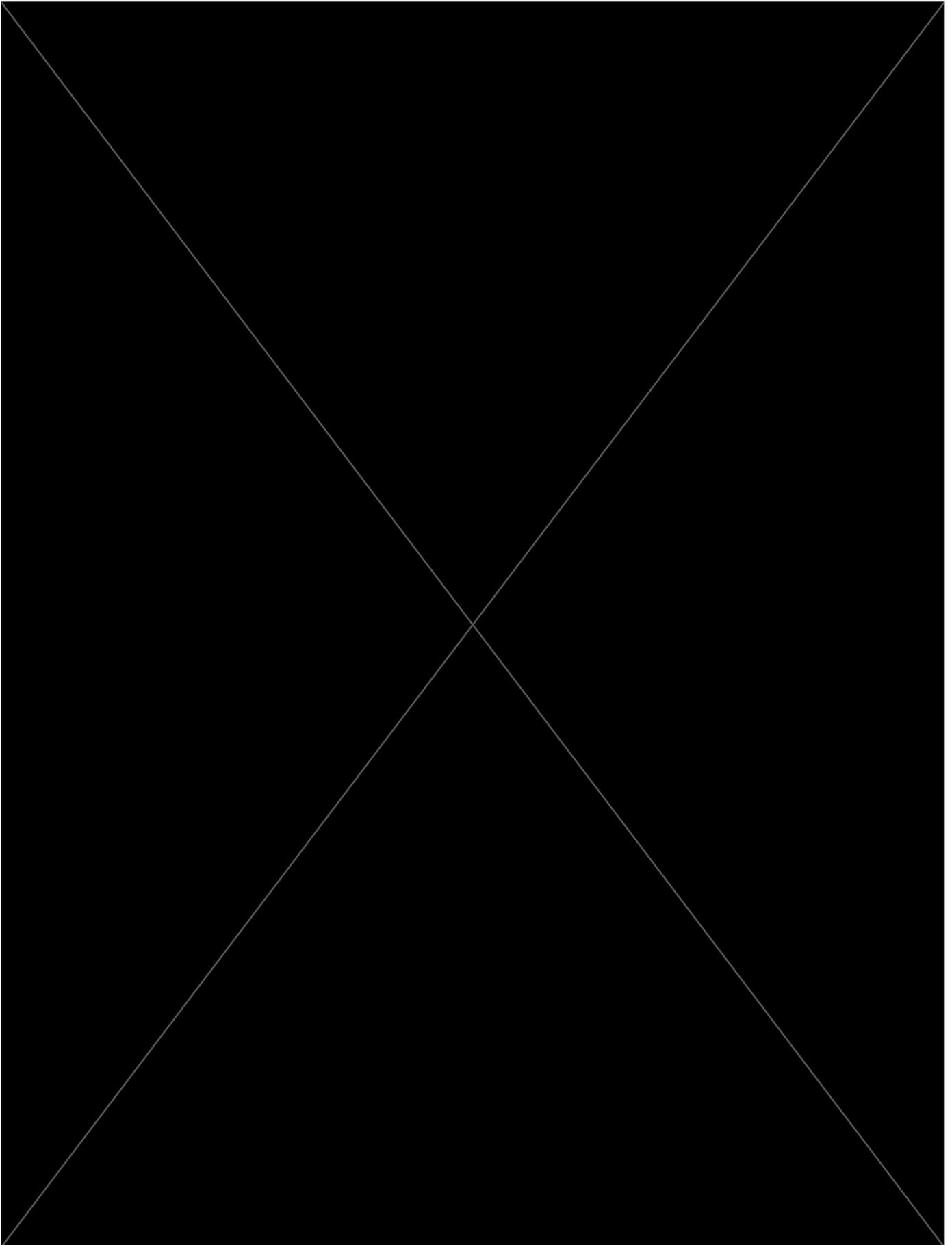
⁴⁹ 新修・北九州市史編纂会議編『新修・北九州市史 文化編・教育編』福岡：北九州市、2018年、209頁。

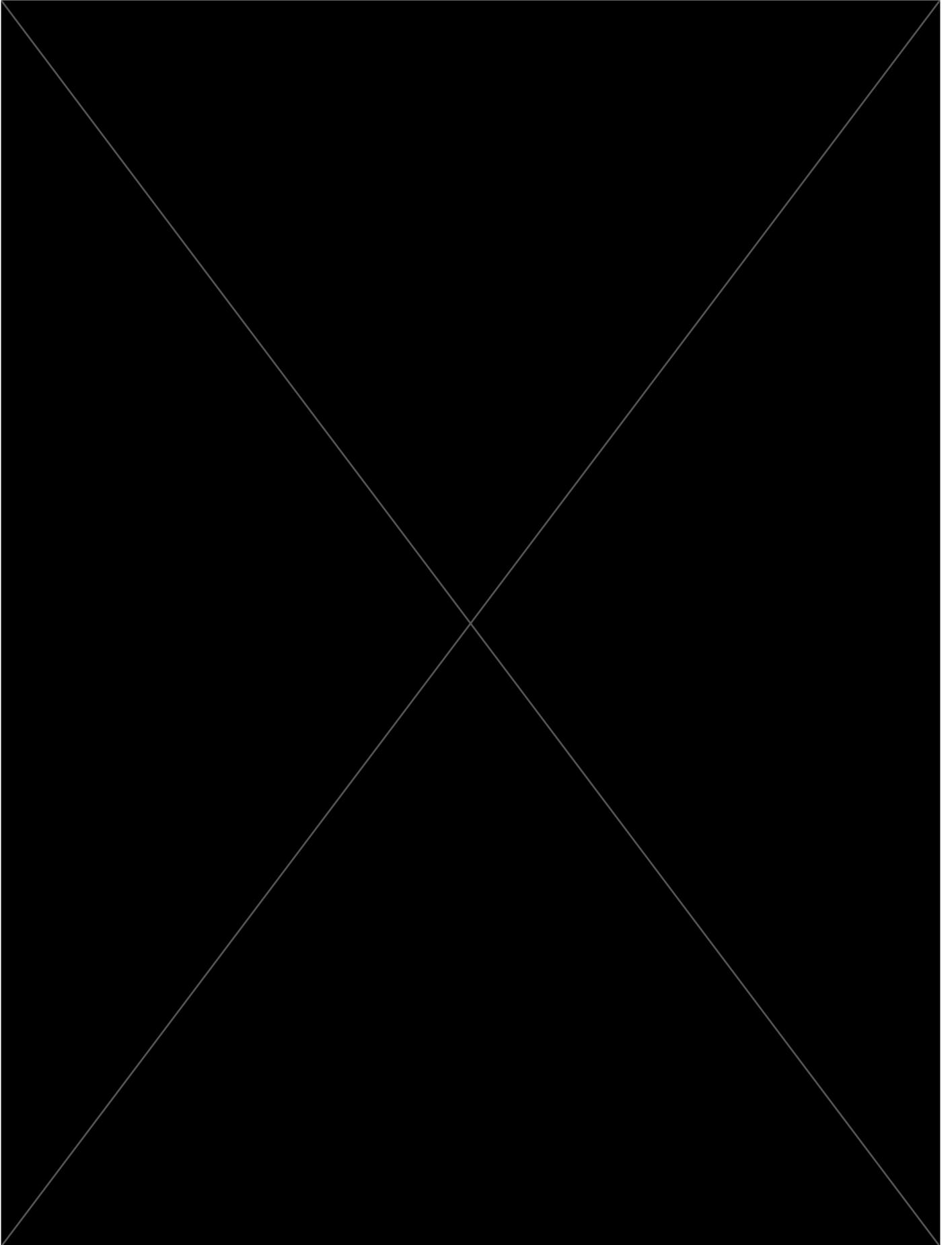
⁵⁰ 「『北九州をうたう会』の結成と今後の発展により、北九州市に新しい文化の動きが生まれ、それがより大きな脈動となって次の世代へと継承されていくことを祈願してやみません。北九州市としても、今後、地域文化の再発見事業として『ふるさと北九州をうたう演奏会』を開催していくなど極力発表の機会を設け、合唱文化の振興に力を尽くしていく所存です。」（赤松 2013：94-95）

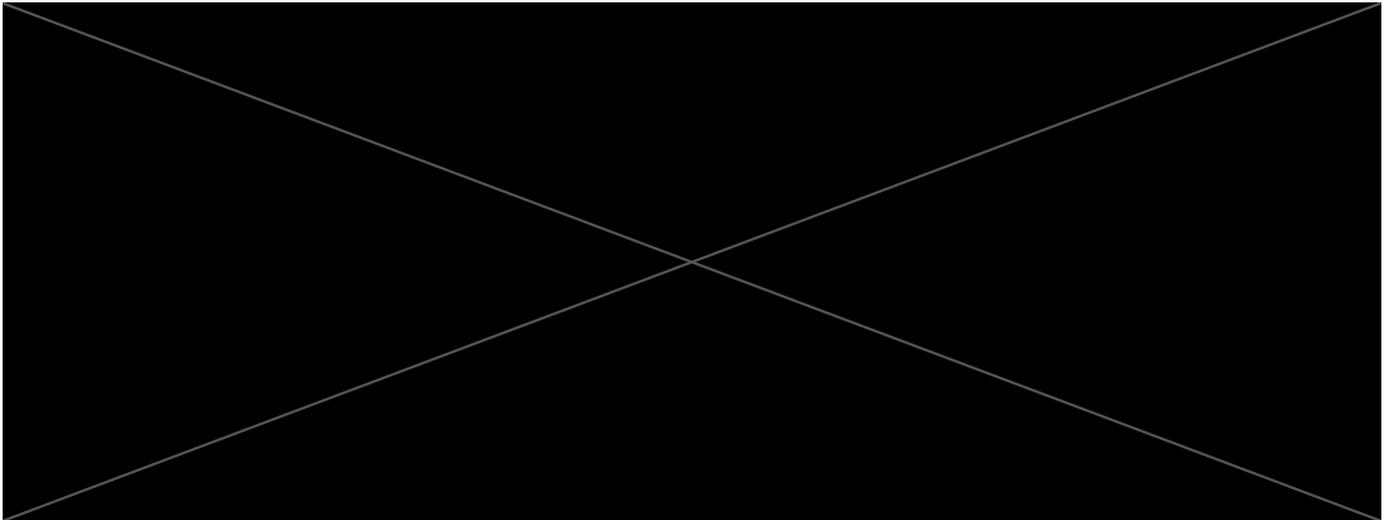
⁵¹ 北九州をうたう会・事務局長三宅よしえ「『北九州をうたう会』15年のあゆみ」、2008年、12頁。

⁵² 新修・北九州市史編纂会議編『新修・北九州市史 文化編・教育編』福岡：北九州市、2018年、13頁。

⁵³ 同前、224～228頁。







【図表 1】北九州市の文化振興に関するさまざまな取組み－長期構想と文化振興（1）

ここで、北九州市の文化行政と《合唱組曲「北九州」》、そして当時の全国的な動きを照合してみたい。

自治体文化行政、そして行政の文化化にかかる全国的な大きな流れのひとつとして、文化庁の発足以降、教育委員会に設置されていた文化課が、首長部局に移設される動きがあった。これについて北九州市は、2003年に国の法改正などをふまえて、教育委員会文化部を廃止し、文化振興課を市長部局の経済文化局に移管している⁵⁴。しかしながら、1970年代以前は、教育委員会のなかでも、文化事業を担っていたのは教育委員会の社会教育部課だとされており⁵⁵、北九州市は、「他の自治体に先駆けて教育委員会の中に『文化課』を設けた」⁵⁶と、その先進性を強調している。これは、のちに《合唱組曲「北九州」》の担当となる末次が教育委員会社会教育部文化課所属の指導主事であったこととも一致する。《合唱組曲「北九州」》の制作を承認した市長の谷は、「文化行政は一般には教育委員会の所管とされていますが、私は積極的に口を出しました」「ともすれば輪郭がぼやけがちな文化行政には、核となる部署が必要だと考えたのです」と述べており⁵⁷、末次が配属された北九州市教育委員会社会教育部文化課は、首長部局のような扱いでもあった。末次は「これまでの学校教育の音楽から、社会教育の音楽へと方向転換した。これまで私は、北九州混声合唱団や、児童合唱団の指導を手掛けてきていたので、これまでのように、学校教育の音楽が基本となり、その

⁵⁴ 新修・北九州市史編纂会議編『新修・北九州市史 市政編』福岡：北九州市、2017年、632頁。

⁵⁵ 大瀬秀樹「社会教育行政の視点からみた大都市文化行政の課題」、北海道大学『社会教育研究』16号、1997年、75頁。

⁵⁶ 新修・北九州市史編纂会議編『新修・北九州市史 文化編・教育編』福岡：北九州市、2018年、197頁。

⁵⁷ 同前、273頁。

成果が社会環境の中に延長されればと考えていた」⁵⁸と語っている。当時の文化行政において梅棹忠夫の教育（学校教育）は「チャージ」、文化（社会教育）は「ディスチャージ」という考察が大きな流れをつくっていたなか、また「教育行政が学校教育中心となっており、文化の問題に対処する余力がなかった」⁵⁹という状況のなかで、このように「教育を文化につなげる」という観点が《合唱組曲「北九州」》の制作に派生した背景は、注視しておきたい。加えて、当時の社会教育論では「社会教育における職員の専門性」が少なからず問題視されており、「職員の専門性とは何を指すのか」「専門性を身につけるためにはどのような教育や訓練をすればよいのか」についての言及がなされていたとされる⁶⁰。この点において、職員を教育し専門性を身につけさせるのではなく、音楽教育の専門性を有する市民を社会教育（文化）の部署に「音楽専門家」として登用した、当時の北九州市行政の対応は傍流なものであったと考えられる。

また、《合唱組曲「北九州」》の制作が始まった1977年前後には、上述した北九州市行政において市民参加の枠が積極的に設けられていた。1980年前後に流布した「文化の時代」「地方の時代」という標語の根底には、地方自治体における行政システム自体に対する危機感とそれに対する具体的な対策としての「文化」への希求があり、「国は、それが各地に広がったところで全国レベルの対策に乗り出した」⁶¹とされている。これについて文化政策学の専門家である根木昭は「文化を希求し、『文化的な環境の実現』を求めることは、人々にとっては優れて地域レベルの課題」であり、「それは、各人が帰属している地域社会における日常の生活の中で、文化を常に享受することができ、また、自らが文化（活動）に参加できる場が整えられることにある」と語った⁶²。さらに、1970年代の後半には、中央の文化を基準として地方の文化を測ろうとする、「中央」の文化と「地方」の文化の間にある「絶対的な格差の意識」が生じており、この状況が地方の人々の心の中に「文化的劣位の感覚」を

⁵⁸ 公益財団法人北九州市芸術文化振興財団「末次寛八『合唱組曲「北九州」の誕生秘話』」、<http://www.kicpac-music.jp/files/12-kumikyoku.pdf>、2020年2月11日取得。

⁵⁹ 遠藤和士・友田泰正「社会教育に対する文化行政論からの問題提起について—梅棹忠夫氏の文化行政論と『月刊社会教育』との比較考察—」、『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』2000年3月、107~121頁、111頁。

⁶⁰ 同前、119頁。

⁶¹ 根木昭 他「1980年代における『文化行政』の時代背景—『文化の時代』の社会的背景と『地方の時代』の文化的側面—」、長岡技術科学大学『長岡技術科学大学研究報告』18号、1996年、63頁。

⁶² 同前。

横たわせ、特に芸術文化においてその格差は厳然と存在しているとも述べている⁶³。つまり、北九州市の市民が抱いていた「文化不毛の地」であるという意識は、決して北九州市だけのものではなく、この当時の「地方」が「中央」に対して抱いていた「文化的劣位の感覚」からきたものでもあったと考えられる。

さらに、根木は、この中央文化との関連における地方文化の捉え方について、歴史学者の塚本学が柴田一の諸論から引用した、①「地方文化は中央文化の地方版」だとする中央文化の伝流説、②「伝流する中央文化を主体的に選択し、摂取」したとする中央文化の選択受容説、③「中央文化を受容しながらも、…これを主体的に変容し、地方独自のものとして創造した」中央文化の変容説、そして④それらのさらに「延長上に地方文化の独自性を一層強調する考え方」として生じた地方文化の独自性説といった4つの分類を参考にあげている⁶⁴。また、当時の自治体文化行政における「地方の時代」は、「中央文化の優越性という歴史的認識から脱却し、地域の全般的な生活環境を整備していく上での中核に文化を据え、『文化的自律性の確保』を強く意識した表現であり、独自性と特殊性を内包した特色ある文化の開発を志向する積極概念として捉えることができる」⁶⁵と提示した。よって、北九州市という「地方」で起こった芸術文化である《合唱組曲「北九州」》も、地域特性の掘り起こしや、地域の主体性確保のための手段として求められた「文化」であり、その「文化的な環境の実現」として、合唱団が組織され、また〈うたう会〉が発足したことにより、市民自らが《合唱組曲「北九州」》という文化（活動）に「参加」できる場が整えられていた可能性を示唆することができる。さらに、《合唱組曲「北九州」》は、その制作経緯や発案者である末次の北九州市としての音楽文化を創造し、郷土愛とともに精神的にも、市民の文化活動を根づかせるといふ思い、谷の市民の郷土への愛情を高め、「文化都市・北九州」を建設するという決意などから考察すれば、塚本の4つの分類のうち地方文化の独自性を一層強調する④地方文化の独自性説に位置づけることができると考えられる。

公立文化施設と大型編成の地域を表象する楽曲

次に、当時、市民文化活動の要としてその存在に可能性が寄せられていた公立文化施設と《合唱組曲「北九州」》の関わりについてまとめる。

⁶³ 根木昭 他「1980年代における『文化行政』の時代背景—『文化の時代』の社会的背景と『地方の時代』の文化的側面—」、長岡技術科学大学『長岡技術科学大学研究報告』18号、1996年、65頁。

⁶⁴ 同前。

⁶⁵ 同前。

1970年代は地方において文化政策、文化事業を推進する動きが登場し、活発化したとともに、内需拡大の政策方針と、それに伴う地方債の発行による動員も同時期に進められており、これによって公共事業も加速していた⁶⁶。ここで全国的に進められた公共事業のひとつが公立文化施設の建設であり⁶⁷、1970年代初めに400館ほどしかなかった公共ホールを含む公立文化施設は、1990年代末には約3000館に達した⁶⁸。後に「ハコモノ行政」と揶揄される、公立文化施設の「建設」に重点を置いた地方自治体によるこの状況は、公演の企画や事業の招致が十分に行われないという事態を招き、次第に公立文化施設は「ただ貸し出すだけ」の施設となっていった。そして、そこからは「市民」や「地域社会」の顔も見えなくなったとされている⁶⁹。

では、北九州市ではどのような状況が起きていたのか。公立文化施設の建設に重点を置いたことについては、北九州市も例外ではない。北九州市の公立文化施設の建設は1958年の門司市民会館と八幡市民会館⁷⁰の開館を皮切りに、1959年に小倉市民会館⁷¹、1960年に戸畑市民会館⁷²、1984年に九州厚生年金会館⁷³、1985年に若松市民会館、1993年に響ホール、2003年に北九州芸術劇場、2012年に黒崎びびしんホールと続き、旧5市それぞれに少なくとも1館は公立文化施設が建設されている。北九州市も「区レベルでの文化活動の場や発表の場を整え、さらには市内の中学校区に公民館を整備し、市民の身近な地域での文化活動を積極的に支援した」⁷⁴と述べている。〈うたう会〉による《合唱組曲「北九州」》の演奏会

⁶⁶ 氏原茂将「発表会が照らす公共ホールの役割」、宮入恭平編『発表会文化論 アマチュアの表現活動を問う』東京：青弓社、2015年、115～134頁、125頁。

⁶⁷ 同前。

⁶⁸ 佐藤一子「地域の発展を支える文化行政と文化施設」、自治体問題研究所『月間「住民と自治」』12月号、2016年。

⁶⁹ 上野征洋の発言（佐藤 2016）。

⁷⁰ 2016年に閉館。

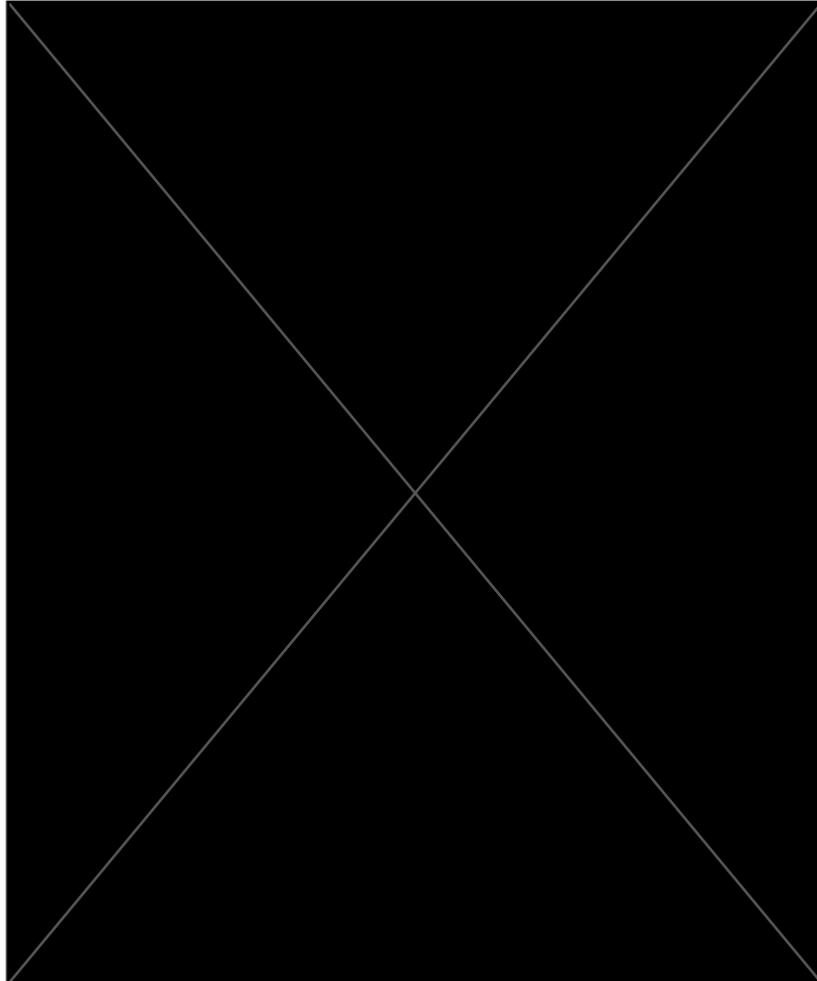
⁷¹ 2003年に閉館。

⁷² 2002年に移転。

⁷³ 社会保険庁が設置。後に北九州市及び周辺地域の住民による40万人以上の署名により、北九州市が国から取得し、現在は「アルモニーサンク 北九州ソレイユホール」の名称となっている（2010年にリニューアルオープン）。

⁷⁴ 新修・北九州市史編纂会議編『新修・北九州市史 文化編・教育編』福岡：北九州市、2018年、10頁。

⁷⁵は、これら北九州市内の公立文化施設を巡回しており⁷⁶、少なくとも年に1度は、《合唱組曲「北九州」》の演奏会で300人から500人の市民が公立文化施設を活用している。



【図表2】北九州市の公立文化施設の推移（音楽関係）⁷⁷

当時の市民文化活動の側面からみるならば、これらの公立文化施設の建設は、良質な音楽や演劇を鑑賞しようとする鑑賞運動に呼応したものの⁷⁸であるのと同時に、文化行政の基本的

⁷⁵ 全章、抜粋演奏合わせて。

⁷⁶ 小倉市民会館（1978年、1997年、2000年）、旧戸畑市民会館（1980年、1997年）、九州厚生年金会館/北九州ソレイユホール（1984年、1986年、1991年、1992年、1994年以降ほぼ毎年）、若松市民会館（1992年、1999年、2010年）、響ホール（1995年、2008年、2018年）、戸畑市民会館（2002年、2008年）、北九州芸術劇場（2003年、2005年）。※現在入手している情報のみ。

⁷⁷ 新修・北九州市史編纂会議編『新修・北九州市史 文化編・教育編』福岡：北九州市、2018年、270頁。

⁷⁸ 氏原茂将「発表会が照らす公共ホールの役割」、宮入恭平編『発表会文化論 アマチュアの表現活動を問う』東京：青弓社、2015年、115~134頁、125頁。

な柱のひとつである「市民文化活動の振興・条件整備（市民文化）」として市民文化が醸成される活動の場を行政と市民が求めた結果でもあった。これは北九州市においても同様である。

共立女子大学教授で横浜演劇研究所所長（当時）だった加藤衛は、文化が専門家による創造的行為からだけでなく、非専門家や一般市民などのアマチュアの創造的行為からも生まれるものだと述べたうえで、その市民文化活動を市民が習慣化できるように日常的に利用し、市民自らが身近に感じて自分たちのものだと実感できる文化施設の設置をおこなうべきだと語り、創造活動の例として岩手県遠野市の音楽民話劇『遠野物語ファンタジー』をあげた⁷⁹。この視座について、地域文化計画やコミュニティ・デザインを専門とする氏原茂将も、「発表会の場」⁸⁰という視点から公立文化施設を「市民文化の創造拠点」として捉えており、森啓の『文化ホールがまちをつくる』⁸¹で提示された「主体の変容」と「新しい関係の創出」といった言葉で語られる理想は、「公共ホールの自治をとおして文化が形成されるとともに、そのプロセスから地方自治の新しい局面を開こうとしたものだ」⁸²と提示している。また、そのプロセスは、神奈川県藤沢市の『藤沢市民オペラ』や、加藤も例としてあげた遠野市の音楽民話劇『遠野物語ファンタジー』にみられ、「公共ホールを舞台としながら市民文化を形成するプロセスで、自治を実践しながら学び、自治への意識と素養を身につけることが思い描かれていた」⁸³と論じている。

このように、市民オペラの先駆けだとされる『藤沢市民オペラ』⁸⁴や、遠野市の音楽民話劇『遠野物語ファンタジー』は、当時の市民文化活動の実践例として、文化行政に関する書籍や論文等でしばしば扱われている。ではなぜ、『合唱組曲「北九州」』はとりあげられてこなかったのか。藤沢市の市民オペラと同様にプロの音楽家と行政、そして市民が協働で制作するという点においては、『合唱組曲「北九州」』も同様であるが、「地域文化」が重要視さ

⁷⁹ 松下圭一・森啓編『文化行政 行政の自己革新』 東京：学陽書房、1981年、129頁。

⁸⁰ ここでいう「発表会」とはカルチュラル・スタディーズの研究者である宮入恭平が提示した「日頃の練習成果を披露するために、おもにアマチュアの出演者自らが出資して出演する、興行として成立しない公演」（宮入 2015：11-12）であり、「発表会の場」とは、「出演者は自分の友人や知人に声をかけ、その結果、会場に集まる人々は必然的に顔見知りを中心になる」場であり、「内輪で行われるパフォーマンスのために、出演者自らが出演料を支払う」場のことである（宮入 2015：9）。

⁸¹ 森啓編『文化ホールがまちをつくる』 東京：学陽書房、1991年。

⁸² 氏原茂将「発表会が照らす公共ホールの役割」、宮入恭平編『発表会文化論 アマチュアの表現活動を問う』 東京：青弓社、2015年、115~134頁、129頁。

⁸³ 同前、132頁。

⁸⁴ 藤沢市の市民オペラが先駆けだとされているが、その他にも大分県民オペラや三河市民オペラなどがある。

れた自治体文化行政の観点で考えるならば、モーツァルトの《フィガロの結婚》など、オペラ作品の既存のレパートリーを上演する『藤沢市民オペラ』よりも、地域を表象する楽曲である《合唱組曲「北九州」》の方が、当時の文化行政の動向をより反映した事例であるといえる。また、音楽民話劇『遠野物語ファンタジー』が口承民話をもとに、市民と行政が協働し、演劇に加え、自作のオリジナル音楽の生演奏、バレエ、民俗芸能を盛り込んだ総合創作舞台⁸⁵であり、『藤沢市民オペラ』も「オペラ」という大型の舞台芸術であることで、市民文化活動として多くの市民が参加するよりしろを有していると考えれば、同じく多くの市民の参加を要する大型編成の楽曲である《合唱組曲「北九州」》との差異はどこにあるのだろうか。

この疑問への回答として、提示される可能性のひとつが「公立文化施設との関係性」である。『藤沢市民オペラ』が制作された背景には、藤沢市民、特にオーケストラや合唱、演劇などのアマチュア文化活動家たちによって公立文化施設を求める運動がある。その結果として藤沢市民会館が建設され、その藤沢市民会館の自主事業のひとつとして始まったのが『藤沢市民オペラ』だった⁸⁶。そして、『遠野物語ファンタジー』はより明確に公立文化施設と関係しており、遠野市はこれについて以下のように述べている。

昭和 46 年に「遠野市民センター」が完成し、これまでの一般的な公共ホール自主文化事業としてプロの劇団の興業などを催していましたが、入場者数は伸び悩んでいました。一方、市の青年会では芝居をやってみたい、また、演劇を通し地元の人たちで交流を図りたいという話が持ち上がっていました。この両者の目標が一つとなり、市民会館と中央公民館の複合施設である市民センターの自主事業として実施することが決まりました⁸⁷。

すなわち、この両者に代表される、自治体文化行政に関する論でとりあげられる事例の多くは、市民自治を実現する場として重要視されていた公立文化施設でおこなわれる市民文化活動という視座で扱われているのであり、制作の発端に公立文化施設の関与がみられな

⁸⁵ 遠野市 公式ウェブサイト「遠野物語ファンタジーとは」、
<https://www.city.tono.iwate.jp/index.cfm/48,1200,87,html>、最終閲覧：2020年6月23日。

⁸⁶ 宮原昭夫『カーテンコールをもう一度 - 藤沢市民オペラ物語』 神奈川：藤沢市、1985年。

⁸⁷ 遠野市 公式ウェブサイト「遠野物語ファンタジーとは」、
<https://www.city.tono.iwate.jp/index.cfm/48,1200,87,html>、最終閲覧：2020年6月23日。

い《合唱組曲「北九州」》とはその成り立ちに明確な違いが存在する。さらに、『藤沢市民オペラ』や『遠野物語ファンタジー』などは、特定の公立文化施設の「事業」として、その発表の場が祝祭的に催されており、オペラや音楽民話劇という上演形式は固定しつつも、その題目が毎年異なることで、公立文化施設でおこなわれる「創作過程」に繰り返し市民が参加できる仕組みとなっている。これはすなわち、公立文化施設でおこなう創作過程や練習に参加することで、市民に市民自治を身につけさせる取り組みだといえる。それに対し、《合唱組曲「北九州」》は「事業」ではなく、あくまで「楽曲」であり、市民に親しまれ、歌い継がれることを最優先に考えて制作されたものだった。また、現在では年に1度、特定の公立文化施設を発表の場として全曲演奏がおこなわれているが、もとは市民が手軽に各章ごとを選択して演奏できる、より市民の日常に近いものとなることを見越して合唱組曲の規模で制作されていること、何より「楽曲」としては完成されているため、市民がその「創作過程」に参加することはできず、本番にむけた練習の場が市民文化活動として機能しているということも、『藤沢市民オペラ』や『遠野物語ファンタジー』などとの大きな差異である。

これはいいかえれば、《合唱組曲「北九州」》が形成する市民文化活動の場は、公立文化施設に限定されないということでもある。『藤沢市民オペラ』や『遠野物語ファンタジー』などと同じ大勢の市民の参加を求めるものでありつつも、特定の公立文化施設の「事業」として始まったそれらと異なり、地域を表象する「楽曲」として制作された《合唱組曲「北九州」》は、その楽曲自体の「創作過程」に参加することができない代わりに、楽曲を「練習」する場が市民文化活動の場となる。また、《合唱組曲「北九州」》の演奏が特定の公立文化施設に紐づけられないことによって、「楽曲」を通じた市民文化活動の場が市内各地に点在することになる。特に、北九州市は、1980年に策定した「新・新中期計画（プラン'80 北九州）」において、「『ハードからソフトへ』という発想の転換」がなされたことは前述した。「社会資本の充実を目指して相次いで大型施設を建設してきた」ハード中心の「モノづくり」に偏らず、「これまで整備してきた施設の有効活用を図るなど、ソフト面への充実」に意が注がれた北九州市において、1977年に制作された《合唱組曲「北九州」》は、そのソフトとなっていた可能性は高い。

市民文化活動としての〈北九州をうたう会〉

では、《合唱組曲「北九州」》はどのような市民文化活動の場を形成しているのだろうか。当時の自治体文化行政において、市民参加における「場」が懇談会や委員会といった形式で

用意されたなか、北九州市は〈北九州をうたう会〉を発足した。〈うたう会〉の役員には「市の各界の有力者など錚々たる顔ぶれ」⁸⁸が並んだとされており、「歴代の市長のもとでの積極的な音楽文化の振興施策」⁸⁹があった北九州市において、その歴代市長（谷、末吉、北橋）の配偶者も〈うたう会〉に所属している⁹⁰。〈うたう会〉会員であり、その歴史を1冊にまとめて出版した赤松も「さすがに、市のバックアップによる合唱団の編成であった」⁹¹と回想しており、一見すると〈うたう会〉は市民主導で結成されたものではなく、北九州市が政策の一環として《合唱組曲「北九州」》を歌い継ぐために結成した、市の意向を強く反映するものであったように見える。しかしながら、〈うたう会〉の発足には、三宅よしえという市民のなかから現れたキーパーソンが関与しており、彼女が〈うたう会〉の活動を通して精力的に《合唱組曲「北九州」》の普及活動に努めたこと、また一市民である三宅との協働によって《合唱組曲「北九州」》が北九州市の政策へ波及したという点が、地方自治体文化行政への芸術文化を介した市民参加として特筆すべき点でもある。事実、三宅の人柄について「途方もないと思えることを、誰が何と言おうとやり遂げてしまう。怖い『ねーさん』ですが、こんな人が居ないと、世の中は動かない？」⁹²と、当時〈うたう会〉の結成に三宅と取り組んだ市職員は語っており、三宅は市職員の間で一目置かれた存在でもあった。

なお、『新修・北九州市史 文化編・教育編』では、北九州市で多彩な音楽文化が作りあげられた背景には、「北九州市の音楽文化の振興が行政主導で行われてきたことは否めない」⁹³と行政主導の政策があったと述べつつも、「行政が文化振興の旗を振っても、それに呼応する人々がいなければ、文化の花は開くことができない」⁹⁴として、そこに「市民力」があったとし、「アマチュアの音楽家やまちづくりの団体も行政の動きに触発され、また、行政に働きかけて、多彩な音楽活動を地域レベルから全市的なレベルにわたって繰り広げてきた」と記されている。さらには、その市民の働きかけが結実した例として、三宅が市長表彰

⁸⁸ 名誉会長として末吉市長、会長に後藤忠雄北九州音楽協会理事長、名誉顧問に栗原一登など（赤松2013）。

⁸⁹ 新修・北九州市史編纂会議編『新修・北九州市史 文化編・教育編』 福岡：北九州市、2018年、23頁。

⁹⁰ 同前、97頁。

⁹¹ 赤松菊夫『歌い継げ！ふるさと讃歌＝合唱組曲「北九州」の半世紀＝』 福岡：せいうん、2013年、92頁。

⁹² 同前、151頁。

⁹³ 新修・北九州市史編纂会議編『新修・北九州市史 文化編・教育編』 福岡：北九州市、2018年、85頁。

⁹⁴ 同前。

を受けるきっかけとなった、旧九州厚生年金会館へのパイプオルガン設置運動が記述され、旧九州厚生年金会館の大ホールに、当初は計画のなかったパイプオルガンを設置しようと、地元の音楽愛好家など市民の有志が「パイプオルガン設置期成会」を組織して寄付を募り、2年半にわたる運動の結果、1億円余（当時）の募金を集め、それを市に寄付して設置されたとその背景が詳述されている。

この市側に信頼され、一目置かれたキーパーソンの存在は、地方自治体の文化行政論でも事例として度々採りあげられる山口県宇部市の『緑と彫刻のまちづくり』に登場する上田芳江の在り方にもあらわれており、自治体行政に対して直接的に意見を伝えることができる市民の有無が、市民と行政の協働では必要不可欠であることがわかる。ただし、同じ市民文化活動ではありながらも、宇部市が、行政の直接的な関与のもと緑化運動推進委員会を組織し、協働の場を整えてから、市民にまちづくりへの参加を促したのに対し、〈うたう会〉は合唱活動をおこなう市民文化団体として組織され、行政はその運営に直接的には関与していなかったこと、そもそも〈うたう会〉の目標が「《合唱組曲「北九州」》を守り育てること、北九州市民の文化活性化の一翼を担うこと」⁹⁵であり、三宅も〈うたう会〉の結成について「市民の市民による市民のための北九州をうたう会」⁹⁶であると述べている通り、〈うたう会〉に参加することと行政のまちづくりに参加することが同義ではなかったことは大きな差異である。これはすなわち、〈うたう会〉の活動は、自治体文化行政が市民に希求したまちづくりへの「市民参加」へ迂回路的に発展はすれども、市民は必ずしも、それを目的に参加しているわけではないということでもある。この、《合唱組曲「北九州」》を歌う市民文化活動の場である〈うたう会〉への参加意図の多目的性は、「参加の動態性」へとつながる重要な視座である。

現在の北九州市行政における《合唱組曲「北九州」》の位置づけ

「地方自治体が独自性を目指した時代」において、その大きな流れを形づくったひとつともいえる《合唱組曲「北九州」》は、現在、どのように市民に受容され、どのような市民が

⁹⁵ 公益財団法人北九州市芸術文化振興財団 公式ウェブサイト「〈北九州をうたう会〉会員募集」、http://www.kicpac-music.jp/performance/others/kumikyoku/g_kumikyoku-boshu.html、最終閲覧：2020年2月11日。

⁹⁶ 三宅よしえ「海峡地帯『北九州を歌う』」、財団法人北九州市芸術文化振興財団『ひろば北九州』82号、1992年5月、3頁。

参加しているのだろうか。ここでは、北九州市の施策上における《合唱組曲「北九州」》の位置づけを改めて確認する。

北九州市は、2008年に策定した基本構想・基本計画である「『元気発進！北九州』プラン」⁹⁷の分野別計画として、2010年に初めて「文化振興計画」を策定した。この計画は「人材育成」を重要視しており、「市民レベルの芸術・文化活動のさらなる支援」と「一流の芸術に日常的に触れることができる環境づくり」という2つを施策の両輪として、その両者で新たな人材の発掘と育成が重要な課題であるとしている。また、「『元気発進！北九州』プランにおける主要施策に基づく取り組み」では、創造都市の成功例としてフランスのナント市とスペインのビルバオ市が紹介されており、そこでは、両都市の基幹産業であった造船業や鉄鋼業などの重工業が衰退したことで、街が疲弊し、失業率や犯罪率が増大した状況を紹介しつつ、その両都市が都市計画の柱に文化を据えて、市民参加型の特色ある取組みを積極的に推進したところ、新たな魅力が生まれ、多くの人が集まり、都市の再生が促されたとし、「同じように、かつて重工業を基幹産業として栄えた本市にも、芸術・文化の分野で新たな価値を創造・発信することは可能なはず」だと述べられている。

「北九州市文化振興計画」では優れた人材の集積と、人材育成を行い、市民の間に地域への愛着やプライドを醸成し、「芸術・文化」⁹⁸に関わるあらゆる世代、ジャンルの人が交流・融合できる環境づくりを行うために3つの主眼⁹⁹が定められており、このうち《合唱組曲「北九州」》は、「芸術・文化の振興」における7つの主要施策¹⁰⁰のうち、「II 市民が芸術・文化に接する機会の拡大」のなかで採りあげられており、「芸術・文化を提供する事業の実施・支援」として扱われている。つまり、《合唱組曲「北九州」》定期演奏会の実施や〈うたう会〉への支援は、市民の芸術文化に接する機会の拡大として位置づけられていた。これは、公益財団法人北九州市芸術文化振興財団の2011年度（平成23年度）から2015年度（平成27年度）事業報告書において、《合唱組曲「北九州」》が、「地域文化振興事業」の枠に位置づけられ、「市民が優れた芸術文化に接する機会や、市民の文化活動の発表の場を提供する

⁹⁷ 2013年度に改定している。

⁹⁸ 北九州市文化振興計画の表記ママ。本論における「芸術文化」と同義であると考えられる。

⁹⁹ 「①市内で行われる芸術・文化イベントの発信力を高めることで『芸術・文化の街』を市内外にアピールする」、「②市民が芸術・文化に接する機会を充実・拡大して、市民一体となった文化振興の取組みを進める」、「③本市に根付く『芸術・文化』に親しむ風土を引き継ぎ、さらに大きく育てる」。

¹⁰⁰ 7つの主要施策とは「I 市民の芸術・文化活動の促進」「II 市民が芸術・文化に接する機会の拡大」「III 発信力の高い芸術・文化の振興」「IV 芸術・文化の担い手の育成」「V 地域における伝統文化の発掘・継承」「VI 近代化遺産などの文化財の保存・継承」「VII 芸術・文化によるまちづくり」である。

ために、公演を実施した」公演事業として扱われていることにも反映されている。また、同時に 2014 年度（平成 26 年度）からは「音楽文化の振興」の枠にも位置づけられ、「音楽の手法を用い、人材育成・教育普及事業を実施し地域に貢献するとともに、地域の音楽文化の担い手の育成・継承を行った」育成事業としても扱われるようになっている。なお、2016 年度（平成 28 年度）の事業報告書からは、「地域文化振興事業」自体が「音楽文化の振興」の枠に組み込まれ、その下に位置づけられており、「音楽文化の振興」における「育成事業」と「地域文化振興事業」の両面を備えた事業として捉えられていた。

上述した「北九州市文化振興計画」は 2016 年に改訂がおこなわれた¹⁰¹。そして、基本理念に定める「市民が文化芸術¹⁰²を身近に感じ、市民自身が文化芸術を支えるまち」の実現を目指すため、「北九州市文化振興計画改訂版」では、4 つの戦略¹⁰³に重点的に取り組むとし、具体的に 7 つの施策¹⁰⁴を提示している。この「文化振興計画改訂版」において北九州市は、次世代を担うこどもたちをはじめ、市民が多彩な優れた文化芸術に親しむ機会を充実させることで、シビックプライドを醸成する取組みや、新たに北九州市のキャッチコピーとして「文学の街」「合唱の街」「映画の街」を掲げ、市民が文化に触れる機会の創出や、観光、にぎわいづくり、福祉への波及、文化財の保存・継承に向けた取組みを進めるとした。

¹⁰¹ この文化振興計画改訂版も位置づけとしては、「元気発進！北九州プラン」の部門別計画であり、北九州市の文化芸術の振興に関する基本計画となっているが、今回の改訂は文化芸術振興基本法や、国の「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第 4 次基本方針）」に基づき策定されたと明記されている。

¹⁰² 北九州市文化振興計画改訂版の表記ママ。

¹⁰³ 4 つの戦略とは「戦略 1 北九州市らしさや特長をさらに強化し、市民のシビックプライドを醸成する」「戦略 2 次世代の担い手を育て、新たな文化芸術の創造につなげる」「戦略 3 文化芸術を生かした、ひとづくり、まちづくり、にぎわいづくりに取り組む」「戦略 4 本市の文化芸術の魅力を国内外に、積極的に発信する」である。

¹⁰⁴ 7 つの主要施策とは「施策 1 市民の文化芸術活動の促進」(1) 市民が行う文化芸術活動への支援・協働 (2) 文化芸術に係る表彰 (3) 文化施設の充実及び活用 (4) 文化施設の維持管理と今後のあり方、「施策 2 市民が文化芸術に接する機会の拡大」(1) 文化芸術を提供する事業の実施・支援 (2) 広報のあり方、リピーターやファン等の獲得 (3) 県や近隣自治体との広域連携、「施策 3 発信力の高い文化芸術の振興」(1) 劇場文化の創造 (2) 「文学の街」の施策の推進 (3) 「合唱の街」など音楽文化の振興 (4) 漫画や「映画の街」の施策の実施・支援 (5) 自然史・歴史施策の充実 (6) 美術文化の振興、「施策 4 文化芸術の担い手の育成」(1) 人材育成に係る事業の実施 (2) 文化芸術の専門家を目指す人材の育成 (3) ボランティアの育成、「施策 5 地域における伝統文化の発掘・継承」(1) 「戸畑祇園大山笠行事」のユネスコ無形文化遺産への登録 (2) 伝統文化の保存・継承 (3) 伝統文化の公開、「施策 6 近代化遺産など文化財の保存・継承」(1) ユネスコ世界文化遺産 (2) 文化財の保護、適切な管理 (3) 文化財の積極的な情報発信・活用、「施策 7 文化芸術によるまちづくり」(1) まちのにぎわいづくり (2) 2020 年東京大会に向けた文化プログラムの検討 (3) 創造都市への取り組み (4) 文化芸術で推進するこのまちの方向性、である。

ここでも《合唱組曲「北九州」》は「施策 2 市民が文化芸術に接する機会の拡大」¹⁰⁵として扱われている。よって、《合唱組曲「北九州」》の位置づけに大きな変化はないと考えられるが、北九州市が新たに「合唱の街」というキャッチコピーを掲げたことは興味深い。「文化振興計画改訂版」において「合唱の街」は、「施策 3 発信力の高い文化芸術の振興」のひとつとしてあげられており、現北九州市長の北橋は市長公約の中で以下を提示している。

数多くの合唱団を有する合唱の盛んな土地柄である素地を活かし、「中学校合唱 フェスティバル(仮称)」の開催を検討するなど、多くの市民が合唱に親しみ、市民の歌声が響く「合唱の街」づくりを進めます。また、合唱組曲「北九州」や北九州市歌の普及に努めます。

これに伴い、2016年1月に北九州市は、「合唱の街・北九州」を掲げ、合唱を通じた人づくり、街づくりを推進するとした¹⁰⁶。さらに『「合唱の街・北九州」の推進』に関する事業のひとつとして、「合唱の街づくり」推進事業が新たに設けられた¹⁰⁷。このように、市長公約において《合唱組曲「北九州」》は、北九州市歌と同列に扱われ、普及対象となっており、『「合唱の街・北九州」の推進』に関する事業としても採りあげられている。また、北九州市は2018年2月に「文化振興計画改訂版」に基づいた文化施策の一環として、「創造都市」の実現に向けた取組みを加速させると発表した。これは市制55周年を契機にした取組みである¹⁰⁸。このうち、「合唱の街」に関しては、地域資源を活かした取組みを展開し、市民の

¹⁰⁵ 文化振興計画改訂版における施策2の今後の取り組み方針は「(1)文化芸術を提供する事業の実施・支援」「(2)広報のあり方、リピーターやファン等の獲得」「(3)県や近隣自治体との広域連携」の3点である。

¹⁰⁶ 2015年12月2日に提供された報道資料には、合唱の街づくりを進めるために、市民活動の豊かな下地を大切にしながら、「合唱のすそ野をさらに広げる」「合唱のレベルをさらに上げる」という2つの目標を示した。さらに、合唱をひとつの入口として、「さまざまな音楽文化のさらなる振興はもとより、子どもたちが文化に触れる機会の創出・拡大や、観光・にぎわいづくり・福祉への波及」も目指すとしている。

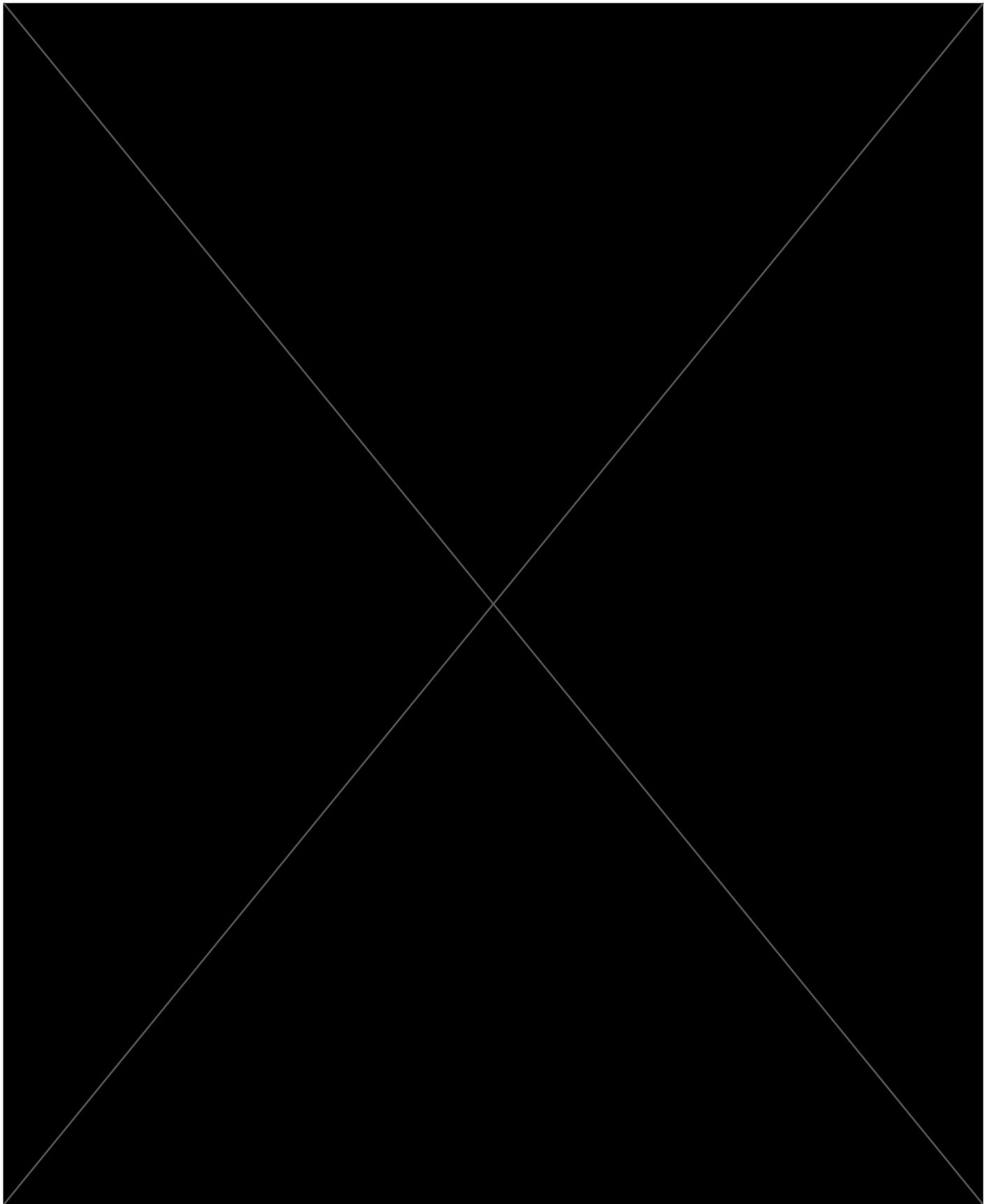
¹⁰⁷ 具体的には、子どもや若者を中心とした多くの市民が合唱に親しむきっかけを作るための合唱を体験するワークショップ等を行うとともに、幅広い層に合唱が普及するための手法や事業のあり方を検討するとある。事業費として2000(千円)が計上されている。

¹⁰⁸ 2018年度は「創造都市・北九州」の都市ブランドを発信する事業を行うほか、「北九州市アーツディレクター会議」の運営、国の補助金を活用して地域経済の発展を担うメディア芸術創造拠点を形成するという。さらに、2020年に開催される文化庁の「東アジア文化都市」の誘致にも取り組むとしている。

シビックプライドを醸成するとしている¹⁰⁹。この「文化芸術の街・北九州」構想のなかで、「合唱の街づくり推進事業」は、「市民の文化芸術との“出会い”の場を提供」する事業に位置づけられていた¹¹⁰。

¹⁰⁹ 文化芸術関連予算も年々増額しており、2015年度の予算が3,766,580（千円）だったのに対し、2016年度文化芸術関連予算は4,476,878（千円）、2017年度文化芸術関連予算は4,553,343（千円）である。2018年度文化芸術関連予算は3,895,257（千円）に減少しているが、これは北九州市美術館の大規模修繕費759,600（千円）によるものが大きい。経常的な経費を除く戦略的な予算は増加しており、事業のための特別経費として2017年度は695,873（千円）だったのに対し、2018年度は842,553（千円）と、21.1%も増加している。

¹¹⁰ 2018年度の予算は7,000（千円）となっている。



【図表 3】北九州市の文化振興に関するさまざまな取組み－長期構想と文化振興（2）

別添資料4 - 『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』の参与観察

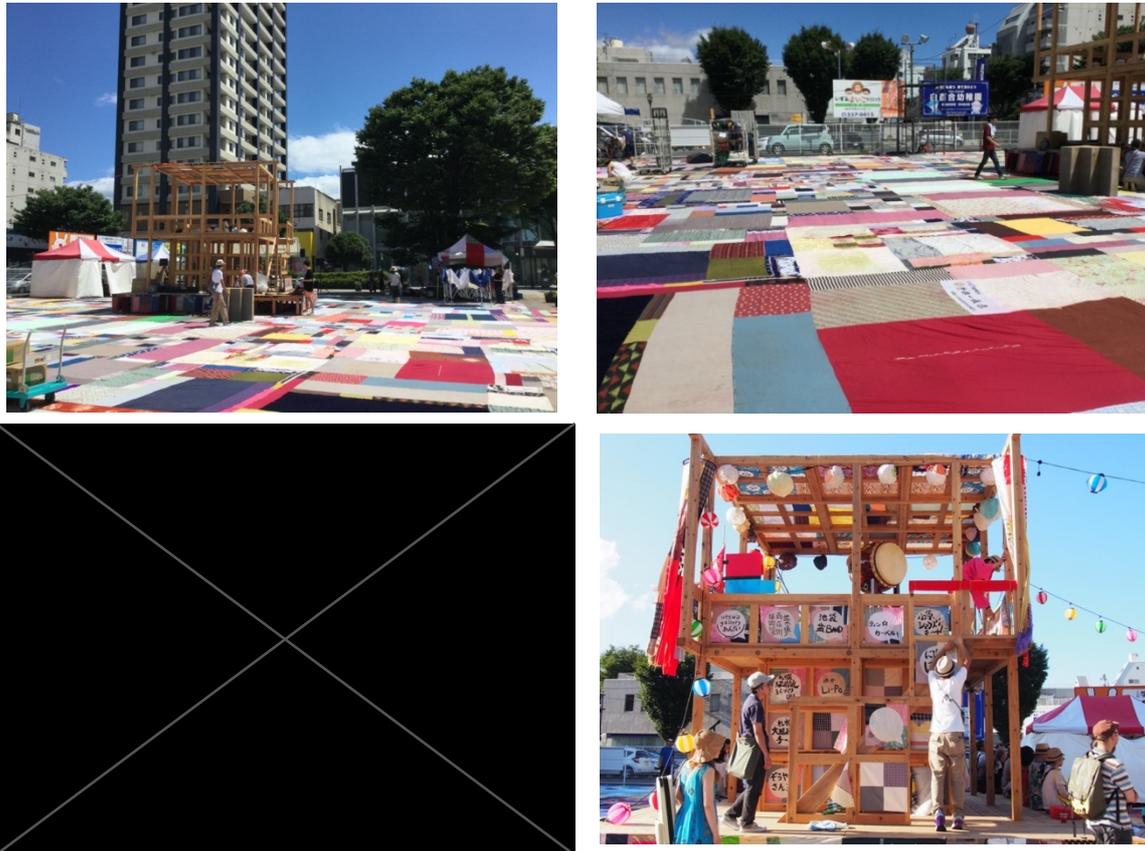
『盆踊りプロジェクト』の場がどのような様相なのかについて、筆者自身の参与観察をもとに描写する。筆者は、2017年度と2018年度、そして2019年度の3カ年に渡って、福島市で開催されている『盆踊りプロジェクト』を参与観察した。2017年度は、〈プロジェクト FUKUSHIMA!〉のスタッフ、そしてそこに集い参加する人々との関係性の構築をめざし、本番前日から準備に加わった。2018年度は『盆踊りプロジェクト』の細かな動向を観察するため、準備期間から本番まで約1週間のリサーチをおこなった。2019年度は外部から集う人々と同じ立場として、本番のみの観察となった。本資料では、特に深く参与した2018年度の参与観察結果を記述する。

筆者は、2018年8月8日から13日にかけて、福島市に滞在し、〈プロジェクト FUKUSHIMA!〉の『盆踊りプロジェクト』である『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』を参与観察した。8月8日に福島市入りした筆者は、その足で、大風呂敷工場として可動し、『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』の準備がおこなわれている大友の実家に向かった。2018年度は新たな大風呂敷を縫う作業はなく、「名入りのぼり旗」¹¹¹の準備や会場設営、物販の準備を中心におこなった。主に、現地のボランティアスタッフが中心となって作業しており、この日は福島外からの参加はみられなかった。筆者は、2名の女性ボランティアスタッフとともに物販として販売する風呂敷を畳んで包装し、また「名入りのぼり旗」に寄付者の名前を筆で描く作業をおこなった。

翌日の8月9日は、台風13号の影響もあり、18時からの作業となった。この日も「名入りのぼり旗」の準備を中心におこなった。8月10日も引き続き「名入りのぼり旗」の準備と、大友の実家の元工場に保管してあった大風呂敷を会場に運搬する作業をおこなった。この事前準備期間中は、筆者以外に東京藝術大学から1名、そして東京大学から4名の学生が授業の一環、または個人のフィールドワークとして参与したが、それ以外の外部からの参加者の関与は特にみられなかった。

¹¹¹ 会場となる福島市・街なか広場に飾られる50cm×50cmの、のぼり旗。5,000円～20,000円の寄付の返礼として、大友の直筆やプロジェクト FUKUSHIMA!美術部によって、希望の名前を入れてもらうことができる。

2日間に渡って開催された『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』の初日である 8月11日は、朝の9時から会場となる福島市の「街なか広場」で設営作業がおこなわれた。まず、「街なか広場」の中心には檣がたてられ、それを囲むように大風呂敷が敷き詰められた。



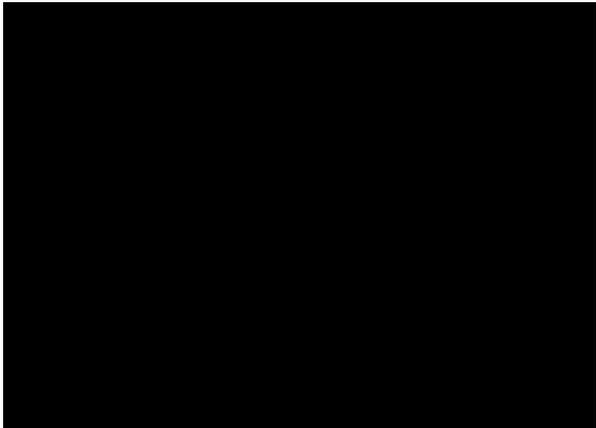
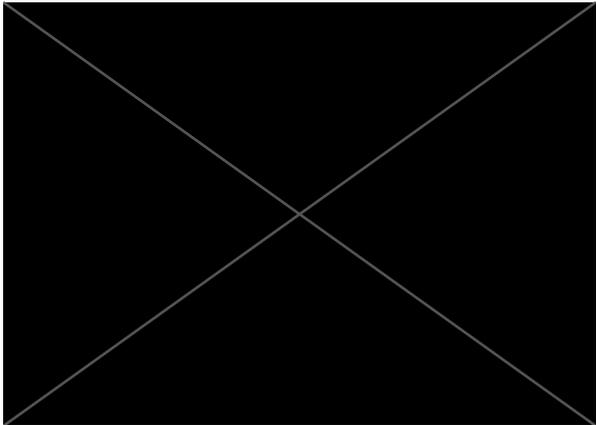
【図表4・5・6・7】¹¹²『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』設営（1日目）の様子（1）：筆者撮影

本番当日の朝には、外部からの参加者が散見され始めた。特に、会場設営には継続して毎年関わり続けている外部参加者の姿が見受けられ、〈プロジェクト FUKUSHIMA!〉のスタッフ、福島県に居住するボランティアスタッフ、福島外から来福した外部参加者たちが、協働しながら『盆踊りプロジェクト』の場を組み立てていった。

福島外から来た参加者は、巨大な大風呂敷の四方を複数人ずつで掴み、それをアスファルトの上に広げ、シワを伸ばしながら、他の大風呂敷とも重ね合わせていく作業から、檣を建て、「名入りのぼり旗」で装飾し、檣に提灯を吊り下げ、本部テントを設営するなど、会場の至る所で、〈プロジェクト FUKUSHIMA!〉のスタッフや福島在住ボランティアと混在しな

¹¹² 図表番号は、左上、右上、左下、右下の順に番号をふった。

がらその場に溶け込んでいく。最初は、〈プロジェクト FUKUSHIMA!〉のスタッフであるアサノや、アーティストの中崎が参加者に声かけをおこなっていたが、次第に参加者たち自らが自発的に動き出すようになる。またそれらの作業と並行して、櫓に向き合うかたちで、ステージが生まれ、「街なか広場」前の道路は、歩行者天国となり、徐々にキッチンカーなどの出店も展開していった。



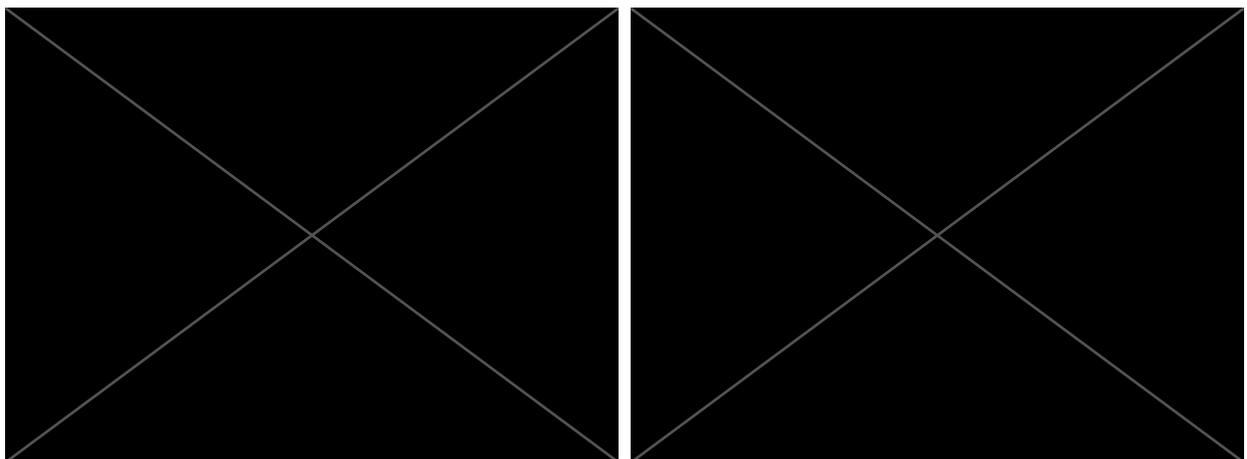
【図表 8・9・10・11】『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』設営（1日目）の様子（2）：筆者撮影

そして8月11日16時、『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』1日目が始まった。タイムテーブルは以下である。

【図表 12】8月11日（土）TIME TABLE

16:00～16:15	山本屋太鼓
16:30～17:00	テニス Courts
17:00～18:00	街なかパレード（指揮・大友良英）
	盆踊り
	・マウイ太鼓「福島音頭」
	・DJ 岸野雄一
18:00～20:00	・DJ 珍盤亭 楽師匠&火縄銃ボーイズ
	・ケケノコ族
	・昨日のカレーを温めて
	・にゃんどこ

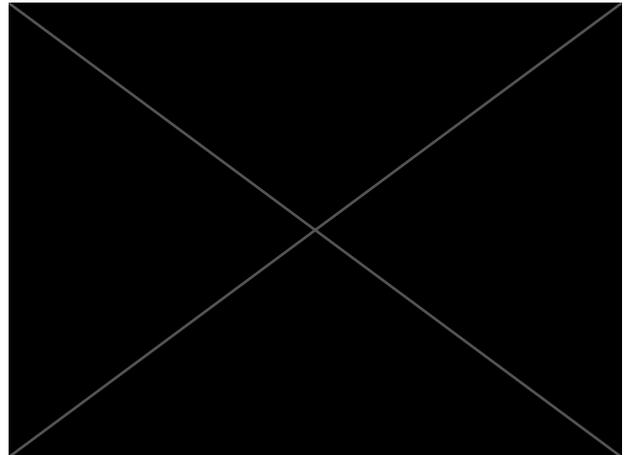
まずは、ステージで、原発事故に伴う避難区域のひとつ、福島県川俣町山木屋地区の若者でつくる和太鼓チーム・山木屋太鼓¹¹³が演奏をおこない、次に、2011年の〈フェスティバル FUKUSHIMA!〉からアーティストとして関与し続けているテニス Courtsと、2018年度に初めて参加したマヒトゥ・ザ・ピーポーによるライブがおこなわれた。この2演目については、基本的に参加者は聴衆として、思い思いにステージの前の大風呂敷に座り、櫓に腰掛け、または立ちながら鑑賞していた。



【図表 13・14】ステージパフォーマンス（1日目）の様子：筆者撮影

¹¹³ 山木屋太鼓 公式ウェブサイト「山木屋太鼓」、<http://yamakiya-taiko.com/>、最終閲覧：2020年7月23日。

ステージを使った演目が終わると、大友による「街なかパレード」に移った。「街なかパレード」では、全国各地から集まったプロ、アマを問わない参加者が「オーケストラ FUKUSHIMA!」として、楽器や音のでるものを持ち寄り、福島駅から「街なか広場」まで続く駅前通りを、それぞれ音を奏でながら練り歩いた。



【図表 15・16】「オーケストラ FUKUSHIMA!」によるパレードの様子：筆者撮影

1日目の最後は、ハワイのマウイ島で日本からの移民が歌い／踊り継いできた福島の《相馬盆唄》を原曲とした《福島音頭》などが、櫓を取り囲んで歌い／踊られた。また、伝統的な盆踊りだけでなく、「盆踊りという古来のフォーマットをどのように更新することができるか」¹¹⁴をめざす東京都中野区の大和町八幡神社大盆踊り会（通称「DAIBON」）を仕掛ける著述家であり音楽家の岸野雄一や、1980年代に社会現象となった「竹の子族」の文化を引用する集団・ケケノコ族、さまざまな盆踊り唄をミックスするDJの珍盤亭音楽師匠といった「盆踊りを現在進行形のダンス・カルチャーとして捉え直し、高齢化などの理由によって活気を失いつつあった東京の盆踊り文化を活性化させ」¹¹⁵てきたパフォーマーたちが、その櫓のうえに登った。そして、金沢明子の《イエロー・サブマリン音頭》、函館名物の《イカ踊り》、西城秀樹の《ヤングマン》などが会場に流れだす。その瞬間、櫓の周りにはさながらフェス会場やダンスフロアのような姿に変貌し、参加者たちはある時は櫓を取り囲み、ある時は見上げながら、音楽に合わせて歌い踊っていた。

¹¹⁴ 大石始「大和町八幡神社大盆踊り会 ライブあり、DJあり。老若男女が楽しめる新感覚盆踊り」、AERAdot×TokyoTokyo『OMATSURI TOKYO』、<https://dot.asahi.com/brandstory/1910wwtokyo/2019092700074.html>、最終閲覧：2020年7月23日。

¹¹⁵ 同前。



【図表 17】 檜上のパフォーマンス、盆踊り（1日目）の様子：筆者撮影

2日目は、大風呂敷の敷き直しから始まった。人が躓かないよう、ヨレたり隙間が空いてしまった部分を、再度テープで接着し、場を整えていく。2日目になると、さらに外部からの参加者が増え、至るところで「久しぶり！」といった声があがる。彼らは慣れた所作で、大風呂敷の綻びを修正し、ピンと張りながら、色とりどりの布の上を駆け回る。



【図表 18・19】 『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』 設営（2日目）の様子：筆者撮影

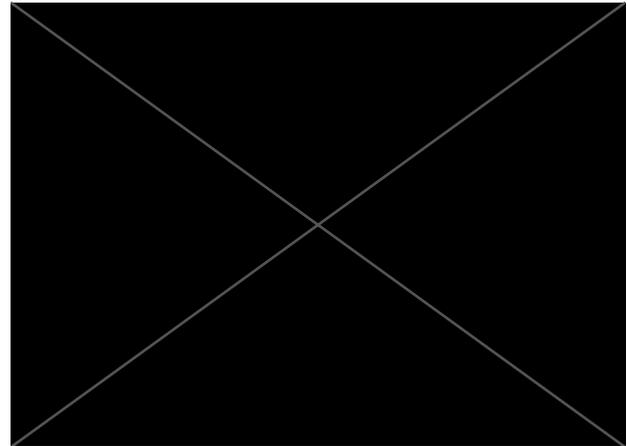
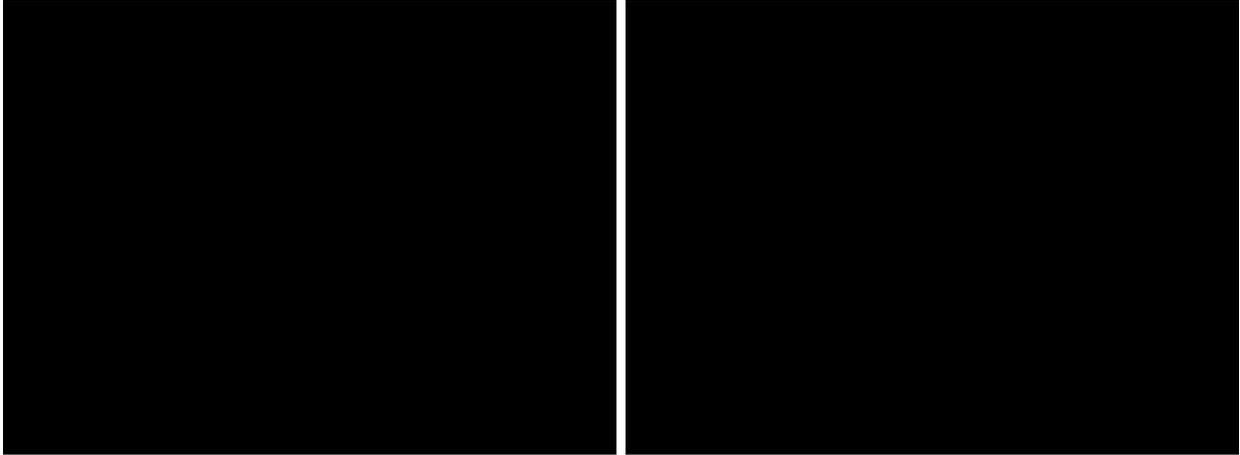
【図表 20】 8月12日（日）TIME TABLE

14:00～14:15	マウイ太鼓
14:20～14:30	HANA
14:35～15:05	マヒトゥ・ザ・ピーポー
15:10～16:00	盆踊り DJ フクタケ
16:00～17:00	クダラナ企画 コケシのど自慢
	盆踊り
17:00～17:30	・マウイ太鼓「福島音頭」 ・伊藤美枝子・双葉盆唄のみなさん
	盆踊り
17:30～19:00	・オーケストラ FUKUSHIMA! (指揮・大友良英)

2日目のタイムテーブルは上記の通りである。2日目も昨日と同様、ステージ上でのパフォーマンスから『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』は開始した。まず、ハワイのマウイ島から来日したメンバーによる「マウイ太鼓」から始まり、福島市のNPO法人 福島・伊達精神障害福祉会の就労継続支援 B 型施設「HANA」¹¹⁶の利用者による音楽パフォーマンス、ミュージシャンのマヒトゥ・ザ・ピーポーのライブへと続く。聴衆として参加した

¹¹⁶ 特定非営利活動法人 福島・伊達精神障害福祉会 公式ウェブサイト「HANA」、<http://hibikinokai.sakura.ne.jp/HANA.html>、最終閲覧：2020年7月24日。

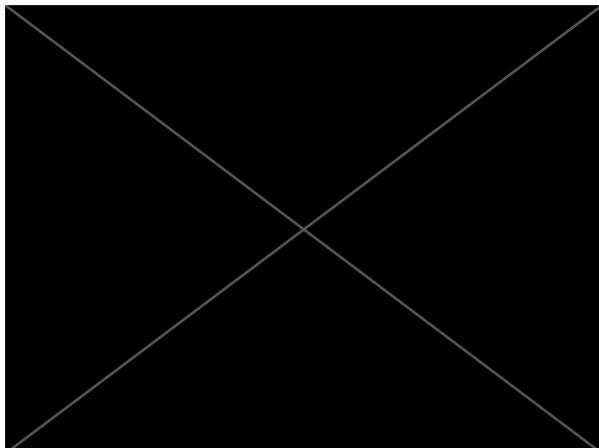
人々は、この日も、大風呂敷に座ったり、櫓に腰掛けたりしながら思い思いに寛ぎ、快晴の空のもと、リラックスした空気のなかで祭りは進んでいった。



【図表 21・22・23・24】ステージパフォーマンス（2日目）の様子（1）：筆者撮影

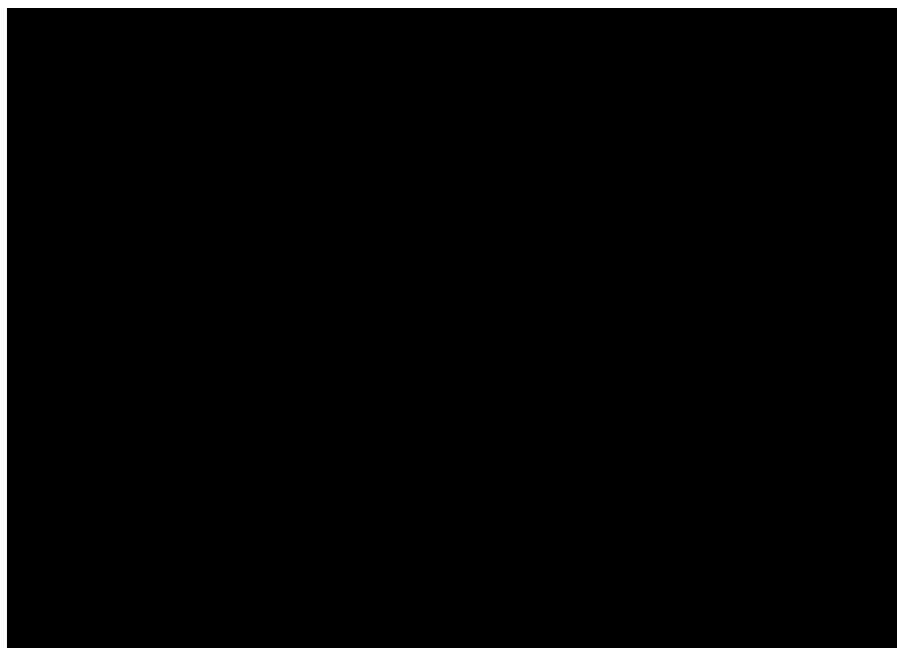
マヒトゥ・ザ・ピーポーのパフォーマンスが終わると、都内のクラブイベントを中心に DJ プレイをおこなう DJ フクタケが櫓に登った。DJ フクタケは、80 年代のテクノ歌謡や和モノと呼ばれる昭和の歌謡曲、ゲーム・ミュージック、そしてアニソンものやノヴェルティーものを中心とする新作音頭をダンス・ミュージックとしてプレイする DJ である¹¹⁷。彼は、ピンクレディーの《S・O・S 音頭》や、《アラレちゃん音頭》《ドラえもん音頭》《オバQ 音頭》などといったどこかこども時代を想起し、ノスタルジーを感じる音頭を DJ プレイしていく。参加者たちは、一箇所に集まって身体を寄せ合い、楽曲に合わせて身体を揺らしていたかと思えば、櫓の周りを囲んで踊ったりと、曲ごとに振る舞いを変化させていた。

¹¹⁷ 大石始『ニッポン大音頭時代 「東京音頭」 から始まる流行音楽のかたち』 東京：河出書房新社、2015 年、257 頁。



【図表 25・26】 檣上のパフォーマンス、盆踊り（2日目）の様子：筆者撮影

DJ フクタケが檣から降りると、ステージで『クダラナ企画 コケシのど自慢』が催された。これは、〈フェスティバル FUKUSHIMA!〉と同時開催されている、マダムギター長見順、ギターパンダ、しりあがり寿が発起人となった〈福島クダラナ庄助祭り〉のメンバーによる企画である。

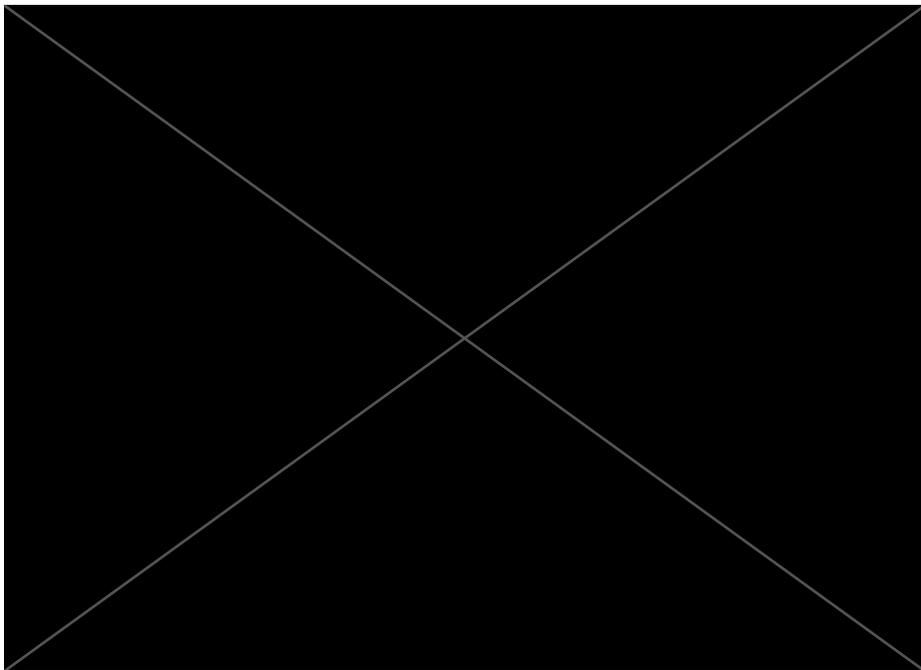


【図表 27】 ステージパフォーマンス（2日目）の様子（2）：筆者撮影

このように、『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』の場では、檣の周りで東京のクラブカルチャーが立ち現れたかと思えば、地元感、手作り感満載の市民による催しが始まり、「盆

踊り」なのか「フェス」なのか、「福島」なのか「東京」なのか、はたまた他の「地元／ふるさと」なのか、「祭り」のもつ非日常性と祝祭性は維持しつつも、徐々にその場に付与された意味が解体されていった。

そして日も徐々に落ち始めた頃、提灯に明かりが灯り、櫓の周りに人々が集いだす。『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』の盆踊りは、昨日に続き、マウイ太鼓による《福島音頭》から始まった。それに続いたのは《双葉盆唄》である。《双葉盆唄》は原発事故によって「警戒区域」に指定された双葉町で受け継がれてきた盆踊りであり、全市民の避難によってその継承が困難となり、その存続が危機的状況に陥っていた。そこで、〈プロジェクト FUKUSHIMA!〉でマウイ太鼓を招聘するきっかけともなり、そのライフワークとしてハワイに日本から伝えられた「ボンダンス」に関わり続けている参加アーティストの岩根愛は、《相馬盆唄》を日系移民がハワイで歌い／踊り継いでいるように、《双葉盆唄》も海を渡って伝承し続けることができるのではないかと考え、双葉町の人々とともにハワイへ赴き、《双葉盆唄》をハワイの人々に継承した¹¹⁸。『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』では、マウイ太鼓のメンバーと《双葉盆唄》を継承するメンバーが同じ櫓に登ってそれを歌い奏で、福島の人々、福島の外から来た人々が櫓の周りを囲んで踊った。



【図表 28】『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』盆踊り（2日目）の様子（1）：筆者撮影

¹¹⁸ この詳細は、映画『盆唄』（監督・中江裕司、制作・テレコムスタッフ）で語られている。参照=映画『盆唄』公式ウェブサイト、<http://www.bitters.co.jp/bon-uta/>、最終閲覧：2020年7月24日。

このように、『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』の盆踊りは、《相馬盆唄》を継承した《福島音頭》や《双葉盆唄》といった、地域に土着文化として深く根差していたからこそ、東日本大震災を契機とした原発事故によって地域社会が破壊されたことで継承が危ぶまれている盆踊りに、福島外の人々が介在し、歌い／踊るといった、「地域」そして「地元／ふるさと」の脱構築から幕を開けた。

盆踊りの後半は、《プロジェクト FUKUSHIMA! 「ええじゃないか音頭」》など、〈プロジェクト FUKUSHIMA!〉によって制作されたオリジナルの音頭が中心となった。セットリストは以下である。

【図表 29】 8月12日（日）〈プロジェクト FUKUSHIMA!〉盆踊り セットリスト

17:30～	オーケストラ FUKUSHIMA! 音だし
18:00～	あまちゃん音頭
18:20～	フジオ音頭
18:28～	地元に帰ろう音頭
18:36～	池袋西口音頭
18:46～	新生相馬盆唄
19:00～	ええじゃないか音頭

演奏は、ステージ上でプロとアマが混在する「オーケストラ FUKUSHIMA!」による生演奏によっておこなわれた。1曲目は、大友が劇伴を担当した2013年度NHK連続テレビ小説・第88シリーズ『あまちゃん』のオープニングテーマを音頭化した《あまちゃん音頭》（2014年制作）¹¹⁹、2曲目は赤塚不二夫没後10年を偲んで開催されたイベント『フジオリックフェスティバル2018』の『バカ盆踊り』のために作曲・大友、Sachiko M、江藤直子、作詞・Sachiko Mによって書き下ろされた《フジオ音頭》（2018年制作）¹²⁰、3曲目は『あまちゃん』の挿入歌であり宮藤官九郎作詞の《地元に帰ろう》を音頭化した《地元に帰ろう音頭》（2014年制作）¹²¹、4曲目は『フェスティバル／トーキョー14』のオープニングを飾った大友と〈フェスティバル／トーキョー〉の総合ディレクションによる《池袋西口音頭》（2014年制作）と続いた。《池袋西口音頭》は、大友が作曲し、歌詞は、『フェスティバル

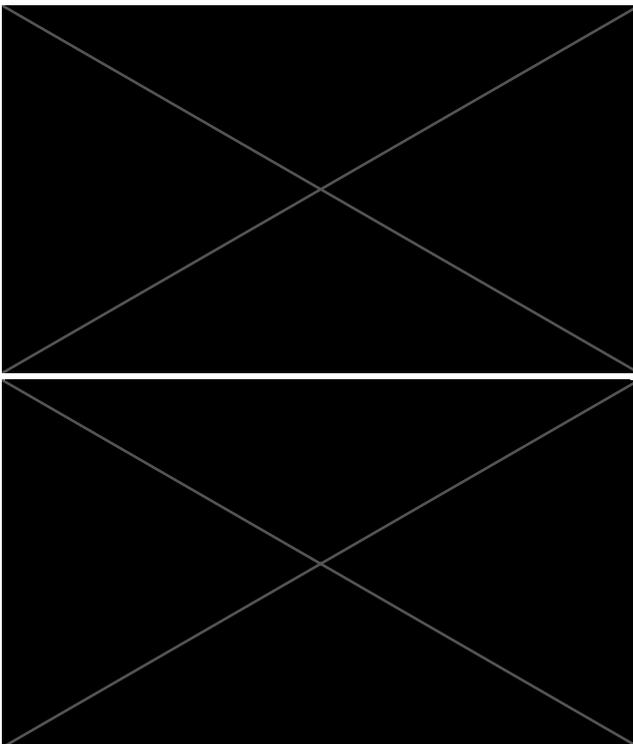
¹¹⁹ CINRA.NET「大友良英らによる盆踊りアルバム、“あまちゃん音頭”や“地元に帰ろう音頭”収録」、<https://www.cinra.net/news/20140610-otomoyoshihide>、最終閲覧：2020年7月24日。

¹²⁰ 二階堂和美 公式ウェブサイト「赤塚不二夫トリビュート音頭『フジオ音頭』の詳細が発表になりました!」、<http://www.nikaidokazumi.net/news/982>、最終閲覧：2020年7月24日。

¹²¹ 音楽ナタリー「大友『地元に帰ろう音頭』PVでSachiko M踊る」、<https://natalie.mu/music/news/122861>、最終閲覧：2020年7月24日。

／トーキョー14』のプロジェクト内において、市民の参加者から「池袋にまつわる言葉」が集められ、大友による構成のもと書き下ろされた音頭であり、「ここは昔は池だった」から始まり、「西口パーク」「サンシャイン」「モダン文化の裏の街」「アングラ 闇市 ネカフェにゲイゲキ」「バスに乗ったら北の国」「イケフクロウ」「乙女ロード」といった「池袋」を表象するフレーズが詠み込まれている¹²²。

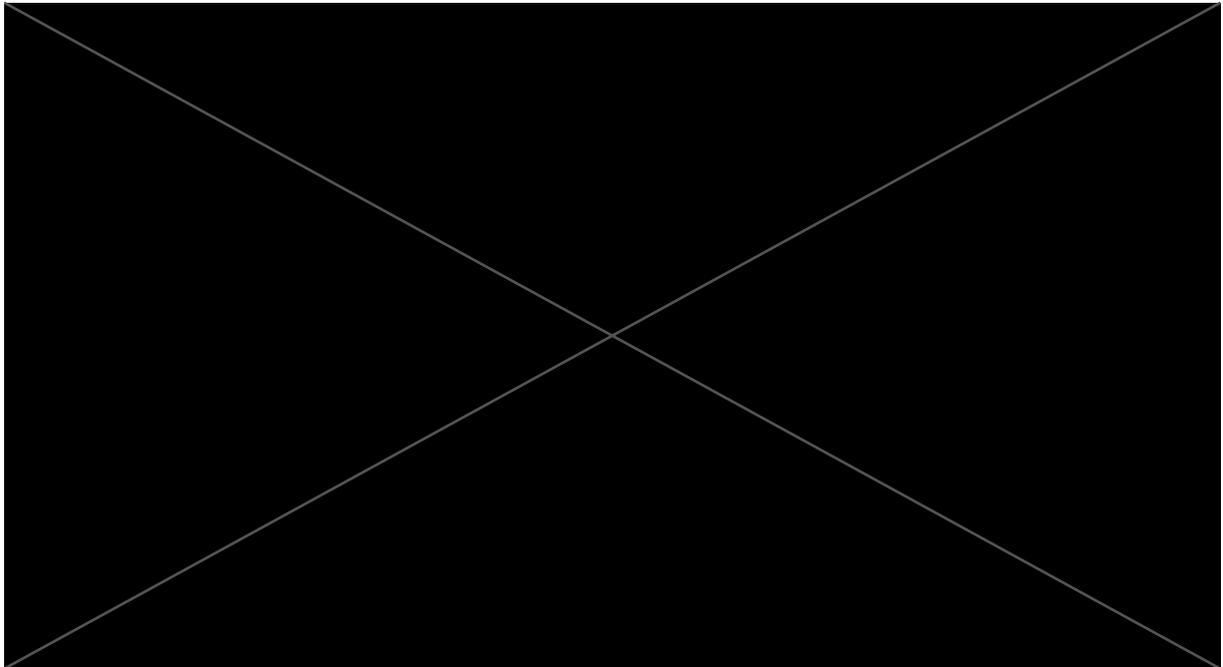
1曲目の《あまちゃん音頭》の時は、まばらだった櫓の周りの輪も、《フジオ音頭》《地元に帰ろう音頭》《池袋西口音頭》と続くにつれ、徐々に密になっていく。また、踊る人々も全く手ぶらの人もいれば、大きなリュックを背負った人、楽器を持った人、浴衣を着た人、Tシャツ姿の人、小さな子ども、若い学生であろう女性たち、仕事帰り風のスーツを着た男性、ラフな散歩着の老人、若い家族などと千差万別の様相を呈していく。彼らは音頭の基本型である両手を左右に振る動きをしていたかと思えば、時に飛び跳ね、手を繋ぎ、輪を逆に進み、また電車ごっこのように肩を連ねて、盆踊りの場を形成していった。



【図表 30・31・32・33】『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』盆踊り（2日目）の様子（2）：筆者撮影

¹²² フェスティバル／トーキョー14「大友良英書き下ろしの新作盆踊り『池袋西口音頭』の動画公開!」、https://www.festival-tokyo.jp/14/news/ff_ondo.html、最終閲覧：2020年7月24日。

そして、周りが薄暗くなり、街灯の明かりも灯った頃、《新生相馬盆唄》(2013年制作)が奏でられた。《新生相馬盆唄》は、山中カメラ¹²³が福島伝統的民謡である《相馬盆唄》をアレンジしたものである。山中は、もとの五穀豊穰、子孫繁栄を祝う歌詞を、どこかもの悲しく切ない曲調で色づけた。「IV→III7→VIIm→Vm[→I7]」といった曲中で繰り返し登場する「切ないコード進行」は、彼が多大な影響を受けたYMOの《perspective》から引用されたものであり、2009年に制作した《別府最適音頭》でも使用されている。また彼は、《相馬盆唄》の歌詞に「クラフトワーク」の《放射能:Radioactivity》の歌詞とメロディーを引用し、リフレインに「*Stop!Radioactivity*」という歌詞を付け加え、《新生相馬盆唄》とした¹²⁴。



【図表 34】『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』盆踊り(2日目)の様子(3):筆者撮影

『あまちゃん』は、岩手県三陸海岸沿いの架空の町・北三陸市を舞台として、東京の女子高生だったアキ(能年玲奈)が母の故郷である北三陸へ移り住むシーンから始まり、祖母の後を継いで海女になったアキが思いがけず地元のアイドルとなる。さらに、東京に戻って地

¹²³ 山中カメラの詳細については、博士論文本文を参照。

¹²⁴ 「山中カメラ 現代音頭集」制作委員会「READYFOR【山中カメラ】現代音頭作品集を作ってボンダンスの輪を世界に!『私は如何にして現代音頭作曲家となったか』福島邂逅編」、<https://readyfor.jp/projects/bondance/announcements/105962>、最終閲覧:2020年7月23日。

元アイドルを集めたグループの一員としてデビューをめざし、その後半では現実世界とつながり、東日本大震災が描かれる。大友は、この『あまちゃん』から大きく影響を受けたと各所で公言しており、ダサイと思っていた盆踊りに自身が関わった背景についても、『あまちゃん』に出てくる台詞で『ダサイぐらいなんだよ!』というのがある、あの言葉で一番救われたのは俺だと思う¹²⁵と述べている。彼は、《ええじゃないか音頭》の制作経緯についても、この「地元」という言葉に対して特に深く思いを巡らせており、『あまちゃん』のストーリー、そして宮藤が作詞した『あまちゃん』の挿入歌《地元へ帰ろう》の歌詞などと結びつけつつ、『あまちゃん』にも通じる考えなんだけど、〈地元〉っていう考え方を変えていかないとキツイと思うんですよ。地元の良さをアピールするのは結構だけど、地元に入れない人もいるし、地元がない人もいる。だから、〈地元〉という言葉にいろんな意味合いを持たせる歌にしたいと思った¹²⁶と語っている。

大友に大きな示唆を与えた『あまちゃん』から派生した《あまちゃん音頭》から始まった『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』は、参加者の胸のうちに「あまちゃん」「東北」「北三陸市」「東日本大震災」を思い起こさせたかと思えば、「東京・下落合」の《フジオ音頭》や「池袋」の《池袋西口音頭》へ続きながら、《地元へ帰ろう音頭》を間に挟むことで同時に、それぞれ個々人の「地元」へも思いを馳せさせる。そして《新生相馬盆唄》では、「今年や豊年だよ 穂に穂が咲いてよ」といった日本の原風景としての「ふるさと」の情景を思い起こさせる歌詞と、もの悲しく哀愁をおびた曲調に続く「*Stop!Radioactivity*」というメッセージから、「ふるさと」という表象に「原発事故」の表象が重ねられる。『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』の場に付与された「福島/FUKUSHIMA」という表象は、こうして徐々に解きほぐされていった。

日もとっぷりと完全に暮れ、場の高揚感が最高潮に達した頃、《ええじゃないか音頭》が始まった。提灯の明かりに照らされた大風呂敷の上を、参加者たちが軽やかに歌い踊る。ステージから「オーケストラ FUKUSHIMA!」のメンバーも降りてきて、輪の中に合流していく。ただし、輪の中に入ることを強制されることはなく、その様子を大風呂敷に座って眺めている人々もいれば、輪の少し外側で身体を揺らす人々もおり、参加者それぞれがその場を自身の振る舞いで共有する。

¹²⁵ 大石始『ニッポン大音頭時代 「東京音頭」から始まる流行音楽のかたち』 東京：河出書房新社、2015年、278~279頁。

¹²⁶ 同前、276頁。



【図表 35】『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』盆踊り（2日目）の様子（4）：筆者撮影

〈地元〉というのは育った場所かもしれないし、好きな場所かもしれない。俺にしたらって横浜生まれで福島育ちだけど、一番長く過ごしてるのは東京なんです。でも、東京が地元かという、よくわからない。（…）〈地元はどこ？〉と聞かれても一言で言えない人ばかりだと思う。そんな風によくわからない人でも、踊りの輪に入った瞬間は〈今はここが地元でいいや〉と思えるものがあると思う（…）¹²⁷

実際自分で音頭を演奏してみて、それでみんなが踊って、それを長時間やっているとトランスみたいになってくるんですね。そのときに初めて、未だにその音楽が好きかはわかりませんが、面白さがわかったというか。やっぱりあのゆっくりしたビートの繰り返しに演奏している方も高揚してきますよね。一番すごかったのは、生演奏でやったんですけど、最初のうちはみんなステージを見ているんですよ。だけど、踊りが白熱してくると誰もステージを見ない。演奏している人は主人公じゃないんですよ。みんな自分たちが主人公で踊っていて、拍手も天に向かってしていたりして、

¹²⁷ 大石始『ニッポン大音頭時代 「東京音頭」から始まる流行音楽のかたち』東京：河出書房新社、2015年、276頁。

場全体がグルーブしてね。そういった光景を見ると、「これだ！」って思っちゃうんですよね¹²⁸。

上述の大友の語りにもあるように、《ええじゃないか音頭》によって形成されるその場や状況は、誰にとつての「地元／ふるさと」でもあり得た。ただし、その歌詞は同時に「福島／FUKUSHIMA」を人々の心象に沁み渡らせる。また《ええじゃないか音頭》によって形成される場がグルーブすることによって、人々は徐々にトランス状態に陥っていく。そして、曲が終わると、誰からともなく拍手が起こった。マヒトユ・ザ・ピーポーはこの時の様子について、次のように想起している。

プロジェクト FUKUSHIMA!という動きは当然知っていたが、生まれつきの天邪鬼のせいもあってか参加するのは八回目の今回がはじめてだった。(…)元々、復興という言葉の持つ複雑な響きに抵抗は拭えず、参加することに不安がなかったかといえは嘘になる。(…)ただ、盆踊りの櫓の上で見た光景はそういった不安の入り込む隙のない、ただただ幸せな時間だった。そして結果的なことを言えば救われたのはわたしの方だった。(…)自分とされている者を拡張し、どれだけ特別で、個性的でいられるか。(…)皆、自分は自分をやめられない。(…)盆踊りの櫓の上で見た光にはその先を描く可能性だった。櫓を囲み、同じ振り付けで踊るその一人一人からは個性が剥奪され、ただ、音と一つになろうとする複数の体温があるだけだった。(…)櫓の上で、用意されたわたしが歌うべきパートはわたしでなくてもきっとよかっただろう。それが清々しく思えることに新鮮な感触があった。それは大友さんのオーケストラの演奏者もそうなのではないか。精鋭たる演奏家たちが一般の持ち込んだ楽器と共に鳴らされる、音楽とは一体何だろう。きっとそれぞれの窓が開き、違った色の風が吹き込んでいることと思う。(…)盆踊りの真ん中で夏を使い切らんばかりにただ、笑っていた。そこには、手をグーにして固持していたわたしなどどこにもいなかった。高揚する温度はそのまま八月と合流し、溶け合いながら、人間の皮をかぶったわたし達は人としての役目を放棄しかけながら死者と踊っているみたいだった¹²⁹。

¹²⁸ 音楽業界総合情報サイト『Musicman』リレーインタビュー「第130回 大友良英氏 音楽家」、<https://www.musicman.co.jp/interview/19682>、最終閲覧：2020年7月25日。

¹²⁹ マヒトユ・ザ・ピーポー『幻冬舎 plus 眩しがりやが見た光』「プロジェクト FUKUSHIMA!の盆踊り」(2018年8月15日投稿)、<https://www.gentosha.jp/article/11019/>、最終閲覧：2018年8月16日。

『フェスティバル FUKUSHIMA! 2018』が開催された「街なか広場」は、熱気と人の笑い声で満ちていた。そこにあったのは、マヒトユ・ザ・ピーポーが語るとおり、それぞれが背負う肩書きから解放され、ただひとりの人として音楽と向き合う個人の総体として、その場に溶け込むことで得られる「多幸福感」がもたらす「幸せな時間」だったのかもしれない。